

性的健康とパートナーシップのための性教育

— 80年代 DDR における性教育の特徴と問題点 —

池 谷 壽 夫

目次

はじめに — 本稿の課題

第1節 青少年をめぐる性問題

第2節 生物・心理・社会的な統一態としての人間と性的健康

第3節 性教育の目標と内容の拡充

第4節 80年代における性教育の総括

第5節 80年代における性教育の問題点と課題

おわりに — まとめにかえて

キーワード：性教育，生物・心理・社会的な統一態としての人間，性的健康，
ホモセクシュアリティ

はじめに — 本稿の課題

80年代においても、性教育に対するドイツ民主共和国（以下DDR）の人民教育省の態度は相変わらず消極的なものであった。それにもかかわらず、いなそうであるからこそ逆に、80年代には、社会状況の大きな変化（ホモセクシュアル当事者の運動、AIDS問題など）のなかで、性教育学者たちは新たな局面を切り開いていくことにもなる。

予め80年代のセクシュアリティと性教育に関して特徴的なことを挙げれば、1つには、性教育の目標が、人間を生物学的・心理学的・社会的な統一態としてとらえることと絡みながら、拡げられていく。とくに、一方での人民教育省の非協力と、他方でのドイツ社会主義統一党（以下SED）の健康重視政策（第11回党大会）のもとにあって、性教育は健康教育の分野において、Aresin, Bachらの努力で活路が開かれ、その一環に位置付けられ展開されていくことになる。

そのきっかけとなったのは、一方ではライブツィヒ青少年研究中央研究所 (Zentralinstitut für Forschung der Jugend) の青少年調査 (JUNGE PARTNER . . .)¹⁾ であり、他方では70年代から教会の傘下のもとに展開されてきたホモセクシュアル運動であり、さらには世界的にパニックとして広がった HIV/AIDS 問題などである (管見する限りでは、DDR では HIV/AIDS とは呼ばず AID と呼んでいるので、以下 AID とする)。

第2に、今述べた青少年調査をとおして、青少年の性の実態の解明とそれにもとづいた対応がいっそう推し進められてくる。また、25歳以下の生徒、職業訓練生および全青少年を対象にしたシリーズ『青少年事典 (Jugendlexikon)』が出版され、『青少年二人で (Jugend zu zweit)』 (Aresin/Müller-Hegemann : 1982a, 初版 1978年)、『若い結婚 (Junge Ehe)』 (Aresin/Müller-Hegemann : 1982b, 初版 1982年) などが出されている。

第3に、健康教育国民委員会や社会衛生協会内部のセクション「結婚と家族」において、青少年の性と健康問題が取り上げられるなかで、ホモセクシュアリティに対する態度も肯定的なものに変化し、ホモセクシュアリティがしだいに受容されてくる。また AIDS 問題と関連して、ホモセクシュアリティ問題が健康問題としても位置づけられ、それをきっかけに、DDR における重要な性教育の問題として日の目を見、積極的に受け止められ展開されようとする。もっとも、性教育の目標は理想的には70年代の目標とさほど大きく変わることなく、基本的には子ども・青少年を愛、パートナーシップ、結婚と家族へと準備させることにあった。

本稿では、80年代の DDR における性教育の特徴と問題点を明らかにするために、まず80年代における性教育の目標の拡充を促した2つの要因を取り上げる。その1つは、青少年の性をめぐる新たな問題、とくに AIDS 問題の出現であり、もう1つは、健康と人間をめぐるより広範な理解の広がりである (第1~2節)。次いで、それらの要因によって80年代における性教育の目標と内容がどのように変わったのかを検討し (第3節)、最後に80年代における性教育の特徴と課題、問題点を明らかにする (第4~5節、おわりに)。

第1節 青少年をめぐる性問題

80年代の DDR における性教育の目標と内容に影響を与えた要因の1つは、青少年をめぐる新たな性問題の出現であった。それは、望まない妊娠、AIDS 問題、およびホモセクシュアリティ問題である。

1. 望まない妊娠と妊娠中絶

青少年の望まない妊娠とその結果としての妊娠中絶は70年代にも大きな問題になっていたが (池谷 2012b)、80年代においても相変わらず性教育の重要な課題の一つであり続けている。Bach (1986) は、性教育において青少年には避妊に関する情報がたくさん与えられているはずなのに、妊娠中絶をする18歳未満の女子の数が近年減っていないことを問題にしている。

Ahrendt (1989) によれば、未成年の青少年の妊娠の約 3 分の 2 が早期の中絶で終わっている。その要因として、Ahrendt は 4 つの要因、 若干の青少年での配慮のなさ、 パートナーとの会話のなさ、 特定の避妊具の拒否、 どの避妊具が青少年には問題になるのか、 そしてそれがどのようにしたら得られるのかについての知識のなさ、 を挙げている (795)。

では青少年の性の実態はどうなっているのか。 青少年調査 PARTNER (1980)・Partner (1990) の調査結果によると、 平均初交年齢は 1980 年、 1990 年とも女子は 16.5 歳、 男子は 16.3 歳 (1980 年 16.5 歳) で、 1980 年から 1990 年の 10 年間ではほとんど変わっていない。 また 16 歳の男子の 47% (1980 年 32%)、 16 歳女子の 59% (1980 年 64%) が初交を体験している (Weller 1993: 70, 71)。

青少年がどの程度避妊をしているのかをみると、 16～18 歳の青少年の初交での避妊手段・方法の使用は以下のようになっている (表 1)。 1980 年ではより確実な避妊具 (ピル、 コンドーム)

表 1 初交での避妊手段・方法 (%)

	1980	1990
ピル	40	50
コンドーム	10	40
安全日	25	17
性交中断	25	16

Weller/Ahredt 1993 : 77.

*1990 年は、複数回答

表 2 初交での避妊手段・方法 (1990) (%)

	全 体			男子	女子
	はい	いいえ	わからない		
ピル	50	49	1	58	42
コンドーム	40	59	1	44	36
安全日	17	77	6	11	23
性交中断	16	83	1	10	23
アフターピル	7	89	4	6	8
他の方法	3	96	1	2	3

Weller/Ahrendt 1993 : 77. 「あなたまたはあなたのパートナーはどのような方法を初交で使いましたか？」に対する回答

表 3 避妊手段・方法の使用 (%)

		年	(ほとんど) いつも	たいていは	時々	いいえ
男 性	コンドーム	1980	4	7	23	66
		1990	17	11	34	38
	性交中断	1980	7	11	34	48
		1990	2	4	27	67
女 性	ピル	1980	53	5	4	38
		1990	77	6	0	17
	安全日	1980	18	15	30	37
		1990	7	4	25	64
	ベッサリー	1980	0	0	0	100
		1990	0	0	0	100

Weller/Ahredt 1993 : 75.

を使っているのは約半数であったが、90年にはその使用が増えてきている。

1990年における初交での避妊手段・方法の使用を詳しく見たものが、表2である。

また、ふだんの避妊手段・方法の利用をみると(表3)、男子のコンドーム使用は1980年に比べると増えてはいるものの、いつも使っているのは17%(1990年、1980年4%)である。これに対して、女子では77%(1980年53%)がピルを服用している。

ここからわかるように、女子の方は8割近くが避妊をしているのに、男子の方の意識的な避妊は20%にも満たない状況である。

2. AIDS問題

もう一つ大きな課題となったのは、AIDS問題である。AIDS症例は1981年にアメリカで最初に報告されて以後、年々増え続けていった。DDRでは、1985年に最初のAIDS患者が出てから1987年までに、25人のAIDS患者が報告されている(Sönnichsen 1987: 12)。

こうしたなかで、日刊紙《Neue Zeit》は1984年6月20日付で、「DDRにはAIDS症例はない(Keine Fälle von AIDS in der DDR)」と報道するが、閣僚評議会は1986年2月28日に、「相談とケアに関するAIDS指針(AIDS-Richtlinien zur Beratung und Betreuung)」をひそかに出し、AIDS撲滅の措置を取り始める。その一方では、Erwin Güntherは雑誌『健康(Deine Gesundheit)』(健康教育国民委員会発行)1985年12月号でホモセクシュアルを贖罪にしないように警告し、また1987年3月10日には、DDRテレビ《Urania Extra》はAIDSとAIDSホビアに関する番組を組んだりしている(Brühl 2006: 131 および <http://www.olafbruehl.de/chronik.htm>)。

性教育でもAIDS問題に対する取り組みがなされている。Bach(1989)によると、DDRではAIDSの撲滅に対する取り組みがなされ、生物教員向けの専門雑誌『学校の生物(Biologie in der Schule)』にはAIDSに関する論文が載せられ²⁾、人民教育省によって全生徒にパンフレット『AIDS—避けることのできる病気 教員向け助言』³⁾が配布され、映画が準備されている(20-21)。Bachは次の理由で、AIDS問題は性教育に統合されねばならない、と考える。それは第1に、現在生徒の心を動かしている問題はAIDSであり、第5学年から、「純粹に知りたい質問」として死にいたる免疫に弱い病気に関する質問が予想されるからであり、第2に、AIDSはDDRにとって一過的な現象ではなく、数十年取り組まねばならない課題だからである(19-20)。

とはいえその際、禁止と道徳律の教育ではまったく効果がない。それらはせいぜい罪悪感、後悔および不安を生み出すだけである。むしろ、「われわれは、知識の獲得、認識の獲得および普通教育を介して、とりわけ自己責任を発達させようとしなければならない。このことは、青少年が知らないパートナーとのあいまいな状況では自制するだけでなく、われわれのもとでは無料で手に入るコンドームによって偶発的な感染から身を守ることを意味する」(ebd.)。

「青少年と健康を」テーマにした第8回健康教育国民会議(1988年)でも、AIDS問題が焦点となった。健康教育国民委員会のもとに設置された研究グループ「性行動の影響」で、Starke

(1989a) は AIDS 問題が性教育に何を提起しているかを論じている⁴⁾。

まず Starke は、自分たちが行った PARTNER 調査から、今日の青少年のセクシュアリティと愛をめぐる肯定的な状況を、以下の 10 点にまとめている (179-180)。

1. 愛とセクシュアリティは青少年にとっては高い生活価値であり、肯定的である。
2. 愛とセクシュアリティという生活価値は他の肯定的な生活価値 (例えば、家族、職業、労働、文化、スポーツ、健康) と二者択一のものではないし、青少年は多くの領域で喜び — そしてまた心配をも — を持っている。
3. 愛とセクシュアリティはそれでも比較的自立した領域であり、若いパートナーの思考と感情において不可分な一体性をなしている。
4. 若い人の性的なものすべてに対する態度は、いずれにせよ基本的傾向においては、きわめて自由で、オープンで、気おくれがなく (unverklemmt)、能動的であると同時に要求豊かであり、センシブルで傷つきやすい。
5. 若い人に支配的な理想は、大きな愛 (große Liebe) であり、排他性と持続性を求めている。
6. 性的充実理想的にはこの固定した愛情関係のうちに求められ見出される。セクシュアリティの快楽機能と関係機能は、互いに密接に絡み合っており、同一であり、あるいは — ロマン主義の表現を選べば — 溶け合っている。
7. パートナーの取り替えは、青少年にあっては、気分転換 (Abweckselung)、気晴らし、お調子者 (Hallodri)、あらわなセックスへの還元としてではなくて、他の人に対する開放性、活発な体験志向、接触能力として、しばしば大きな愛を探し求めてのまじめな任務である。
8. この点で、さらにまた別の理由からも、パートナーの流動性についての性急な軽蔑は戒められる。
9. とくに変化したのは青少年女性の性行動で、今日、青少年男性と青少年女性の性交年齢は一致しているし、オーガズムは早くからあり、以前よりももっと多くの女性がそれを経験している。
10. セクシュアリティに対する肯定的な態度によって、近年および最近の数十年に、性行動の個々の局面に対する青少年の態度も一部は根本的に変化してきた。それは、例えば、女性のオーガズム、快楽体験、避妊、マスターベーション、性交のない充足形態、親密な接触での可変性、裸、性的なものに関する会話に対する態度であり、そしてなかならずホモセクシュアリティに対する態度であって、ホモセクシュアリティは今日青少年によってセクシュアリティのヴァリエーション (別の形) として承認されている。

Starke によれば、こうした積極的な青少年の状況をつくり出した社会的条件は、以下のものである (180-181)。

- ・充実したパートナー関係をふくめて人々が幸福を求めることの受容

- ・女性の同権
- ・家族および青少年の促進・支援
- ・居住条件を含めた生活条件の改善（青少年の3分の2が自分の部屋をもっている）
- ・より高い教育
- ・避妊具が無料で手に入れられること
- ・結婚・性相談所、健康教育指導センター（Kabinette für Gesundheitserziehung）のシステムの拡充と質の向上、Urania⁵⁾の講演その他の多くの相談・啓発活動の拡充と質の向上
- ・学問書や大衆科学的な本およびまたマスメディアでの愛とセクシュアリティの諸問題に関するオープンな議論

だが、こうした青少年のセクシュアリティに対する肯定的な態度が今や AIDS によって危険に晒されている。とはいえ、Starke は今日の青少年をめぐる肯定的側面をまず確認することを忘れない (181-182)。

1. 14・15歳の多数派はそもそもまだ性的接触を持っていない。これらの青少年を不安と恐ろしさに晒すのはまったくナンセンスである。たとえ彼らもまた情報を得ていなければならないとしても、である。
2. 青少年は、自分のパートナーをたいていは直接の知り合いの仲間から探す。彼らは、最初の性的接触をするときに、誰と関わらねばならないかを心得ているし、そこで病気を染される現実の危険は、DDR のたいていのテリトリーでは、今日ゼロに等しいかあるいはほぼゼロに等しい。
3. パートナー数はたいていの青少年にあってはかなり少なく、固定したパートナーシップを求めている。
4. たいていの青少年はすでに AIDS に関する十分な知識を持っているか、ないしは目標を持った啓発を通じてその知識を急速に獲得している。
5. コンドームは青少年に無料で手に入るし、将来は使用者にもっと身近に生産されるし、青少年施設においても提供されるであろう。また、しだいに青少年のコンドームに対する態度が変化している。パートナー調査 では、65%がはっきりとコンドームに反対していたし、青少年女性のほうが青少年男性よりも反対が多かった。28～30歳の男性の41%が当時、まだコンドームを使ったことがないと言っており、継続的な使用者は4%しかいなかった。しかし、この態度がすでにはっきりと変化しており、今後もっと変化しなければならないし変化するであろう。
6. DDR における生活様式には、栄養不良、病気、ドラッグ嗜癖といった、病気を発生させるいわゆる共同要因にとって好都合な基盤がない。保存血液による感染は同様に今や排除されている。
7. DDR では AIDS テロルと AIDS ビジネスおよび AIDS 不安の社会的基盤はない。また、青少年は、性的にアクティブでもそうだからといって差別されない。

8. DDRにおける愛・性行動はAIDSの撲滅を妨げるどんな制限にも服さない。愛とセクシュアリティは、きわめて若い人々のそれであっても、DDRにおいては基本傾向において主権を有する人格の建設的な、生産的な事象として実現される。

こうした確認の上で、StarkeはAIDS問題の危険性について、以下の点を指摘している(182-183)。

1. 青少年はウィルスと接触する限りで、ウィルスそのものによって危険に晒される。それゆえ、青少年はどのようにHIV感染が世界とわが国で広がっているのかについての正確な知識を必要とするし、さらに、ウィルスが自分の身体で何を引き起こすのかそしてどのような徴候が病気の発生の際に示されるのかについての正確な知識を必要とする。また青少年は、これまで以上に、感染そのものについての使える(handhabbar)知識を必要とする。可能な感染予防、ウィルスが体内に入る経路に関する知識である。
2. 生命を肯定する、快楽に満ちたセックスと死の危険との間の矛盾は、多くの青少年には解き難く、逃げ道のないものに思われるし、そして彼らがこれによって、ウィルスそのものによってではなく、彼らの生命機能において、愛とセクシュアリティにおいて傷つけられるというリアルな危険がある。
3. 青少年にとっての危険は、青少年が接触不安を膨らませる(aufbauen)ことを学ぶこと、彼らに離れ離れになること(Auseinanderrücken)が勧められること、友好的な付き合いから親密さが奪われること、身体的な隔たりそして結局は人間的な隔たりが維持されること、結局はまた、セックスが独り歩きして、人間とその関係から切り離され、愛と関係から離れてしまい、セクシュアリティが人間の親密さと身体的近さにおいて実現されるときにこそ、悪、危険、罪深いものと考えられることにある。
4. AIDSが青少年にとっておよび社会全体にとって危険になるのは、それが他人に対する不安をつくりだして、病気に対する不安をつくり出さない時である。
5. AIDSは若い人々を不安にさせる。一方では、彼らの多くはこのテーマにもううんざりして、AIDSを不適切に主要問題にすることを拒んでいるし、他方では、彼らは正確な情報を求めている。

こうしたAIDS認識を踏まえて、Starkeは性啓発と性教育が変わらねばならないとして、こう結論付けている。「AIDSは青少年の性啓発と性教育をよく考え、それを換え、違ったふうにすることをわれわれに余儀なくさせる。そのための基礎は、正確な情報、率直な言葉、きちんとした指摘である。同時にAIDS、自分自身と自分の感覚、他人、これらに対する不適切な不安を追放して、あらゆる道徳化を避けることができねばならない」(184)。

また、Starke(1989b)は、研究グループ「性行動」での討論で強調された5つの主要路線(Hauptlinien)の1つとして、AIDS問題に対する一致点を挙げている。「AIDS問題については、AIDS撲滅の肯定的な緒口が危険とリスクと同様に挙げられ、AIDSを不適切に前景に置いたりパニックを広めたりせずに、AIDSについて正確にかつオープンに情報を与えねばならない

ことで一致がみられた。その際重要なのは、AIDS現象の医学的・ウイルス学的、心理学的、社会学的、倫理的、法的その他の側面を考慮することで、青少年の質問に答えることができるし、彼らに彼らのパートナー関係をつくるさいに安心・安全を与えることである」(206-207)。

3. ホモセクシュアリティ問題

70年代終わりごろから、ホモセクシュアル当事者が自助グループを形成し、ホモセクシュアリティを市民的権利として求める運動が顕在化してきた (Brühl 2006 ; Sillge 1991 ; 池谷 2013)。また、それまでと違ってホモセクシュアリティはもはや病気でも逸脱でもないことが性科学者によって承認されるようになる。こうして、ホモセクシュアリティ問題にどう対処するのが、性教育学者に問われることになった。こうしたなかで1985年6月28日にライブツィヒで「ホモセクシュアリティの心理・社会的局面」という最初の公的に承認された「ホモセクシュアリティ」に関するワークショップがセクション「結婚と家族」と皮膚科学協会・セクション男性性病学 (Andrologie) の合同で開かれ、ホモセクシュアル当事者や研究者らが集う (Aresin/Bach/Günther 1985)。その後第2回ワークショップが1988年、第3回が1990年に開催されていく (その詳細については池谷 2013, 参照)。

さて、PARTNER の調査結果 (16~30歳の青少年) をみると (Schnabl/Starke 1984)、たしかにDDRの青少年の多くは、ホモセクシュアルな傾向のゆえに人を差別すべきではないと頭では考えている (表4)。しかし、同性間の性的接触そのものに対してとなると、感情的な反発は多い。男性同士の性的接触に対しては、58%の青少年、とりわけ男性の方がまったく感情

表4 ホモセクシュアルの傾向に対する態度 (%)

	1	2	3	4
全体	52	40	4	4
男性	47	43	5	5
女性	55	37	4	4

誰もホモセクシュアルの傾向ゆえに差別されるべきではない。
これは私の意見に、1.完全に合う 2.ある限定付きで合う 3.ほとんど合わない 4.そもそも合わない
Schnabl/Starke 1984 : 300.

表5-1 男性同士の性的接触への態度 (%)

	1	2	3	4
全体	58	20	11	11
男性	70	16	7	7
女性	48	23	14	15

男性間の性的接触を私は感情的に拒否する。これには、1.まったくそうだ 2.ある限定付きでそうだ 3.ほとんどそうではない 4.まったくそうではない

表5-2 女性同士の性的接触への態度 (%)

	1	2	3	4
全体	55	23	12	10
男性	57	22	11	10
女性	54	24	12	10

(Schnabl/Starke 1984 : 301)

的に拒否し（男性 70%，女性 48%），女性同士の接触に対しても，55%（同 57%，54%）がまったく拒否しているのである（表 5-1，5-2）. Schnabl/Starke（1984）は，こうした感情的拒否は自動的にホモセクシュアリティに対する不寛容を含むものではないが，しかしそれでも古い道徳規範と結びつくと，ホモセクシュアリティに対する偏見となると分析している（301）.

今の性的活動においても性的ファンタジーにおいても，青少年の多くは異性のパートナーに向かっている. しかし，これまでのホモセクシュアルな接触をきくと，経験したものは 7%（男性 8%，女性 6%）となっている（表 6）.

Schnabl/Stark は，この調査から，大まかに見積もって青少年期にはおそらく 10%かそれよりも少ないものが同性のパートナーとの性的接触を何らかのかたちでもっているが，真正のホモセクシュアル数は，1%かせいぜい 3%であるとしている（305）.

Starke（1985 = 1989）が 1985 年に学生たちにじかに「あなたはホモセクシュアルですか」と質問し，「1 はい，2 いいえ，3 わからない（bin mir nicht sicher）」で答えさせた結果では，男性 1.6%，女性 1.1%となっている（表 7）.

表 6 性的接触（%）

	1	2	3
全体	7	89	4
男性	8	88	4
女性	6	91	3

同性のパートナーと性器を刺激する親密な身体的接触を初めてした年齢は..... 1.経験 年齢 を述べる，2.まだこの種の体験をしたことがない，3.これはなにもわからない
Schnabl/Starke 1984 : 303.

表 7 ホモセクシュアルかどうか

	1		2		3		無回答		総計
全体	35 人	1.4%	2331	90.1	37	1.4	185	7.1	2588 人
男性	21	1.6	1196	93.3	21	1.6	44	3.5	1282
女性	14	1.1	1135	86.9	16	1.2	141	10.8	1306

Starke 1985 = 1989 : 145.

また，Starke（1989c）が女子大生にホモセクシュアリティ概念を連想してもらった結果，次のことがわかった. 73%が男性を連想したように，ホモセクシュアリティは男性問題だと考えられていること， ほぼ半数はホモセクシュアルが女性的特徴を持つと誤解していること， 約 80%がホモセクシュアルであることの困難さ（非難，承認されない，拒否，軽蔑）を挙げていること， 寛容と社会に言及がなされていること， 少数がホモセクシュアルとの接触不安を挙げ

ていること、ほとんどの女子大生がホモセクシュアリティについて質問をもっていること、ホモセクシュアリティをきっかけに「愛」「パートナーシップ」「パートナー」が連想されていること。に関連して、Starke はこれまでの調査結果も踏まえて、ホモセクシュアリティに対する青少年の質問をこうまとめている (29-30)。

- ・ホモセクシュアリティって何？ (病気？、逸脱？、性格の弱さ？、非道徳？、倒錯？)
- ・ホモセクシュアリティはどのように表現されるの？、そしてホモセクシュアルの行動はどういうものなの？ ホモセクシュアルは別の人間なの？ ホモセクシュアルは「本物の」男性ないしは女性なの？
- ・男性のホモセクシュアリティと女性のそれとはどんな違いがあるの？
- ・ホモセクシュアリティはどうして生じるの？ ホモセクシュアリティへ誘惑されることがあるの？
- ・ホモセクシュアルは愛し、結婚し、家族をつくり、子どもを育てることができるの？ホモセクシュアリティは性的なものだけに関わるの？
- ・(男性の) ホモセクシュアルの差別、迫害は歴史的には何に由来するの？
- ・今日ホモセクシュアルは DDR ではすべての市民と同じ権利があるの？ 彼らはその特殊性を十分に発揮できるの？
- ・DDR は公式にホモセクシュアリティとホモセクシュアルに対してどういう態度を取っているの？

このように、ホモセクシュアリティに対して青少年は誤解と無知を持つ一方で、さまざまな率直な質問を抱えているのである。

だが、ホモセクシュアル自身が抱える悩みと困難に対して当時の研究者がいかに無理解であったかを、ある事例がはっきりと示している。1984年の『健康 (Deine Gesundheit)』誌上に不安を抱えた一人のゲイ青年 D.M. が編集部に次のような彼の窮状をあえて打ち明け、これをきっかけに読者の手紙のやり取りがなされた。

私は 24 歳で極めて善良な両親の子どもです。私には職業やその他もろもろのことがあります。たった 1 つのことがこの牧歌的風景には合いません。私はホモセクシュアルです。これを誰も知らないし、誰にもこれを知らされてはなりません。さもなくば私は鞭打ちの刑罰を受けねばならないでしょう。そんなわけで、よく私は、親や親戚や同僚から、いったいいつになったら結婚しようとするのかと、質問されます。私は窮地に陥っていると思いますし、ほとんど途方に暮れます。他人を欺かねばならないので、いつも口実と嘘だけです。でもこんなことはそんなに続くわけがありません。なにしろそんなことしても何にもならないのですから (……) 私は私の周りの人々みんなの間で全く一人だと感じています。分別と理解が欠けているので、私は誰ともこのことについて語るできません (……) D.M. (Stapel 1989 : 82 より)

この悩みに対して編集長の Misgeld (フンボルト大学歴史研究所・医学時代史教授) はこともあろうに、孤立せずにホモセクシュアルであることをつつみ隠さずオープンにすることを勧めたのである。「(……) わが国の法制は (……) 市民をその性的ポテンシャルからは評価しません。自分の親と同僚に対するオープンさによってのみ、自分の場所とおそらくはまた一定の安心感を見つげだすことができます (……)」(83) と⁶⁾。

また, Bach (1989) によると, 教育現場にはまだまだ次のような現状が見られるという。「主要な教育の担い手は同性愛を言わないでおくか, あるいは正しくない情報を与えたり, その動機が何であれ, ヘテロセクシュアルな多数派が人道的な態度を発達させるのを妨げており, ホモセクシュアルだと思っている生徒の不安感情を強め, 彼らのアイデンティティ発見を妨げ, 彼らにノイローゼを生じさせるのもまれではない」(17)。そこで, Bach は偏見が構築される前に, ホモセクシュアリティについて, 家庭と学校で第8学年以降にはじめて伝達するのではなくて, 小さい頃から, すなわち, 子どもが愛とセクシュアリティに対して関心を持ち始めるときから伝達する必要があるとしている (ebd.)。また優先的な課題として, 「教員の知識を広げて彼らの態度をわが人道的な社会主義原理と一致させるための, 教員の継続教育」(18) を挙げている。

第2節 生物・心理・社会的な統一態としての人間と性的健康

80年代には, 70年代から継続され研究されてきた学際的な「社会的なものと生物学的なものとの関係」をめぐる議論から, 人間を「生物・心理・社会的な統一態 (biopsychosoziale Einheit)」としてとらえようとする研究が広がってくる。例えば, 『ドイツ哲学雑誌 (Deutsche Zeitschrift für Philosophie)』(DZfPh) 誌上では, 「生物・心理・社会的統一態としての人間」について学者たちにアンケートがなされ (DZfPh, Heft 2, 3/1985), 同年11月にはフンボルト大学に, 研究プロジェクト「生物・心理・社会的統一態としての人間——人間の個体発生とダイナミクス」(Biopsychosoziale Einheit Mensch-Struktur und Dynamik der Ontogenese des Menschen) が設けられて, 人間を生物・心理・社会的な統一態としてとらえる研究が進められていく (DZfPh, Heft 2/1988: 98)。こうしたなかで, 人間をもっぱら「社会的諸関係のアンサンブル」であり, 社会的に規定された存在ととらえるこれまでのマルクスの第6フォイエルバッハ・テーゼ解釈がしだいに相対化されることになった (BZgA 1995: 33)。すでに池谷 (2012a) で見たように, これまで第6テーゼの解釈によって, 人間はもっぱら社会的に規定されるものとして生物学的条件は蔑ろにされていたが, 80年代になると, 人間がより包括的にとらえられるようになり, 生物学的条件もまた考慮されるようになったのである。

こうした傾向は, 80年代初頭のセクシュアリティ研究にも見ることができる。例えば, Aresin (1983) は, 「人間のセクシュアリティにおける諸問題が, かつて思っていたよりも, 個々人の健康 (Wohlbefinden und Gesundheit) にとって大きな意義を持つこと, および, 性的無知と誤った観念とさまざまな健康問題との間には重要な関係があること」(13) が明らかになっ

たとして、WHOによる以下の「性的健康」の定義を引き合いに出している。「性的健康とは、性的存在の身体的、情動的、知的および社会的の局面が、肯定的に人格、コミュニケーションおよび愛を豊かにし高めるように統合されたものである」(WHO 1975)。

Aresin は、この性的健康の定義から、社会的局面（「社会的・個人的倫理と一致するように、性的・生殖行動を組み入れることができること」）、心理的局面（「性的反応を妨げ性的関係に害を及ぼす不安、恥ずかしさ、罪、誤った観念および他の心理学的要因から自由であること」）、および生物的局面（「性的機能と再生産機能に害を及ぼす器官上の障害、病気および欠陥から自由であること」）(13)、という3つの基本的要素を引き出し、確認している。そして、こうした局面から、人間のセクシュアリティをも次の3つの局面からなるものとしてとらえている。すなわち、「再生産の前提としての生物学的な局面」、「快楽体験としての主観的な局面」、および「とくに内密なパートナーコミュニケーションによる人間間の局面」(13-14)の3つである。このように、Aresin は、人間のセクシュアリティを生物・心理・社会的要因の総体としてとらえるのである。

Borrmann (1983) もまた、性的行動に関して次のように述べて、生物学的条件をないがしろにしてはならないとしている。「行動様式と態度はまずもって歴史的に変化する環境との人間の能動的な対決の成果」であり、「性特有の行動様式もまた何よりも現実との対決のあり方の成果である。それらは男女の異なる社会的な機能・要求・期待ならびに活動の結果生じる、したがって主に、そのつどの社会の具体的・歴史的な性格とその代表者たちの階級帰属に応じて、男女に対する相違する発達の条件・可能性の結果である」(343)。しかし、「このマルクス主義的立場は決して、人間一般の発達のための生物学的条件や男女間の生物学的違いを拒否するものだ」と誤解されてはならない。重要なのは、「生まれつき存在する生物学的所与はただたんに人間の可能な発達の一般的な枠組を規定するだけで、ひじょうに大きな可塑性をもっていること、社会的環境とそれとの対決が人間の発達を本質的に規定すること、である」(343)。ここから Borrmann は、教育の重要性を指摘する。

Borrmann (1989) では、まずはじめに、セクシュアリティの発達に即して、「人格発達のための生物・社会・心理的諸条件」が、次のように述べられている(40-41)。

人間にとって生殖の目的を果たすことはセクシュアリティの唯一の局面ではない。セクシュアリティは明らかに再生産のための前提であり続けるとしても、しかしさらなる局面として、心理的主観的に快楽体験として感じられる、生物的・衝動的な快楽欲求の充足および、社会的な点で意味のある、他人の全人格をとらえる人間的に価値のある関係の基礎づけも付け加わる。

かくて人間のセクシュアリティは、互いに不可分に結び合っている物理的、心理的および社会的な要素をそのうちで統合している。そこからわかるのは、人間にあってセクシュアリティは人格全体の一構成要素であり、性行動は人間の行動全体の一要素であって、生物的に

も心理的にかつ社会的にも決定されていることである。ところで人格の他の部分領域の発達と同じ合法則性に従うセクシュアリティの発達過程は、上述の決定因が複合的な弁証法的な相互作用の中にあり、これはその系統発生的な発達の過程においてばかりではなく個人的な性体験においてもそうであることをはっきりならしめる。それらの共同からまさしく性行動のその形成・体験の質における大きなバリエーションの幅と多様性が生じる。

その上で、Aresin と同様に（というより Aresin 論文をそのまま引き写して）、世界保健機関の先の「性的健康」の定義から、3つの基本要素を引き出している。すなわち、「支配的な道徳と人格的欲求にもとづきながら、社会的な期待の統一を保ちつつ、性行動を全体的な行動へと組み入れる能力」、 「性的反応を妨げ性的関係に害を及ぼすことがある、不安、恥、罪責といった要因から自由である心理学的状態」、および 「性的および再生産的な機能に害を及ぼす器血的な障害、病気および欠陥から自由であること」(48) の3つである。Borrmannによれば、この要素は、性的な陶冶・訓育に大いに依るものであるから、性教育は「性的健康の創造と維持にとって不可欠な条件」(ebd.)なのである。

第3節 性教育の目標と内容の拡充

こうして生物・心理・社会的統一態という人間観にもとづいて、性教育の目標も、70年代の性教育目標に「性的健康」がいわば「接ぎ木」あるいは「建て増し」されながら、微妙に変化していく。

1. 性的パートナーシップの重視

80年代における表向きの性教育の目標の中心は、70年代と基本的に同じく、愛、パートナーシップ、結婚および家族への準備とされている。しかし、そこでの強調点が微妙に変化しているように思われる。

Grassel (1983) は性教育の目標について次のように述べている。「われわれは性的陶冶・訓育をパートナーシップ、結婚および家族への準備の一部として理解する。性的陶冶・訓育は、個人が、パートナーシップ、結婚および家族における自分の関係を、人格とパートナーシップを促進するように形成することができるようにさせることを目指すべきである」(164)。「性教育 (Sexualerziehung) をつうじて、個々人は、異性とのパートナーシップ的關係を進展させ、そのうちに自分の生活とパートナーの生活との有意義な向上をみいだすことができるようにされるべきである。さらにそれには、自分の性 (Geschlechtlichkeit) と異性の特徴、性關係の特別な問題に関する知識ならびに結婚・家族生活のダイナミクスに関する知識が入る。これらの知識は、意識的で幸福なパートナーシップ・結婚・家族づくりについての一つの重要な前提である。最後にまた性教育 (sexuelle Erziehung) の目標には、成長期にある者が、後になって親として

自分の子どもをモデルとなる自分の行動とよき普通教育と特殊教育をつうじて、異性との出会いへと準備させることをできるようにさせることも入る」(ebd.)。

また、Bach (1989) も性教育を、「成長期にある者を愛、パートナーシップ、結婚および家族へと準備させるもの」としてとらえ、その目標を「マルクス・レーニン主義の倫理と道徳の原則に合う態度と行動様式を発達させる」ことに置いている。その原則の一つがBachによれば、「男女同権と性的指向の同価値性」であり、具体的には「社会的・情動的・性的充足に対して両パートナーが等しい権利を持つこと、ならびにパートナーにこの体験を可能ならしめる義務を意味する」。もう一つの原則が「責任と忠実・貞操 (Treue)」(16) である。

だが、Bachは、社会的必要性への洞察・理解と道徳原理の人格的意義を伝達し、またそれに合った態度を発達させるだけでは、不十分だと考える。この点で、「性倫理教育 (sexualethische Erziehung)」概念がさまざまな文書に採り入れられているとしても、それは性教育を狭隘化するものである。むしろ「性教育には同様に、自分の性、異性の特色、男女関係の特別な問題、最初の情熱の陶酔から喜びと苦悩をともに過ごすことの深みを増したより穏やかな海に至るまでの男女関係のダイナミックスと発達、これらに関する必要な知識を備えることも入る。それにはまた、人生の葛藤状況をともに解決しようとする意志の発達も入る」(17)。こうしてBachは性教育を倫理的側面からだけではなく、男女関係のダイナミックスに関する知識や人生の葛藤状況を解決しようとする意志の発達をも含めて広くとらえ、そのことによって結婚と家族への準備教育の強調をいわば「中和」している。

この「性倫理教育」とは、管見する限りでは、もともと教育科学アカデミー総裁のNeuner (1972) が強調した概念であり(池谷 2012b, 参照)、後で見るとSendeもそれを強調している。とすると、BachはここでNeunerやSendeらのいわゆる主流派における性教育の倫理教育への矮小化を批判していることになる。これに関連して興味深いのは、Richter (1985) に対するBorrmann (1986) の批判で始まった両者の論争である。そこでは、性倫理教育が重要な争点となっており、性倫理教育の意味するところがより露わになっているからである。そこで、この論争について触れておこう。

Richter (1985) は、極端に高い離婚率、高い性病感染率や女子での中絶という否定的側面を強調して、ある行動をもっぱら「ノーマル」だとして分類することをこれ以上受け入れてはならず、「真に人間的な行動様式のために設けられた秩序の外部でのあまりに早くに実行されるセクシュアリティは、社会のためにはなりえない」ので、「むしろわれわれは首尾一貫して、倫理的・道徳的尺度を高くたてるよう努めるべき」だと、性の倫理教育を主張する。さらに、性教育関係の今日の文献では性教育の問題に対して明確な言明がなされておらず、見解の不統一にぎょっとするとまで言う。Richterにあっては、「秩序は、人間的存在のカテゴリーであって、これなしには人間的な、それゆえ核においてヒューマンな発達を考えられないし可能でもない」、したがって「ヒューマンに生きられた人間的なセクシュアリティの秩序を探し求めることが、現代のもっとも切迫する任務の1つである」し、この観点から、「自分自身のセクシュアリティの克服に困

難をすら抱えている者は、性教育にはまったく不適切である」(283)とまで言い切っている。その結論はこうである。「若い人に対するわれわれの答えの中心点には、(……)性倫理的な内容の明確な表明があらねばならない。そこでは、性的結合は男女間の心身の連帯 (leibseelische Gemeinschaft) の最高の表現であり、したがって2人の人間の間の愛のもっとも重要なしるしであることをはっきりさせることが肝要である。まさにこれこそがきっと人間と動物とのもっとも目立った違いの1つである。こうみれば、性教育は真の人間性 (Humanitas) への教育の一部でなければならない」(285)。

これに対して、Borrmann (1986) は、Richter の青少年の性の現状と性教育に対する否定的な見方と禁欲的な性倫理教育の強調とに反対する。前者については、「歴史的には短期に、男女の不平等と古臭い順序付けの克服に対してと同じく、セクシュアリティの開放的な態度に対して妨げになっていた偏見とタブーを一掃することができた」(335)と評価する。そしてStarke/Friedrich (1984) で確認された成果——「われわれは成長期にある者の道徳的な状態を心配するに及ばないこと」——にたって、「若い人は愛とセクシュアリティに触れる多くの事柄においてより古い世代のメンバーにけっして道徳的に劣ってはいない」こと、逆に「彼らは偽善を軽蔑し、彼らの感情を表明し、上品ぶることと闘い、彼らが愛に属するものだとして理解するセクシュアリティに対して注目に値するほどよい態度をもっている」(335)と、青少年の現状を評価する。

後者に対しては、Borrmann は次のような肯定的なセクシュアリティ観と性教育観を対置させている。その普遍的な目標は、「個人的な欲求と社会の期待とに等しく応えるように、人格に自分の性と異性との出会いをつくることができるようにさせる、そうした性意識・性行動を発達させること」であるが、これは自然科学と社会科学の知識の一体系を前提としている。それゆえ「これらの知識こそ、パートナーシップ、愛、セクシュアリティによって特徴付けられるすべての点にわたって実証される態度、確信、倫理的決定、体験・行動様式の前提となる」。そしてこの領域には「他者の人格の尊重、子どもに対する愛、意識的な親性、ならびにまた快樂にみちた喜び (Beglückung) をも得るに値するものと思わせる性愛に対する緊密な関係におけるセクシュアリティの肯定」(336)が含まれている。

このBorrmannの批判に対し、Richter (1986) は反批判して、Borrmannがいう偏見とタブーの一掃で、同時に「多くの伝統的な良き、実証済みの、それゆえまったく保持するに値する行為」(339)もまったく除去されてしまったと考える。Richterにあっては、非婚で生まれた子どもの割合の高さや離婚した夫婦の子ども数を「自然に与えられたもの」として受け取ることに甘んじることができないし、近づいてくるAIDS問題と依然として高い性病感染率を前にして、「われわれは青少年の間に流布している乱交にこれ以上情眼をむさぼって向き合っていることができない」。こうした状況認識から、Richterは、性教育の目標は、「セクシュアリティを安定した異性愛的な単婚の結合へと水路づけることでしかありえない」(340)とまで言い切るのである。

以上の論争からわかるように、第1にDDRにおける性教育理解は必ずしも一枚岩ではなく、進歩的な理解だけではないし、第2に、Bachのいう「性倫理教育」はRichterにみられるよう

な保守的な文脈で理解されねばならないであろう。つまり、ここでいう性倫理教育は青少年の性行動をたんに否定的にとらえるばかりではない。それはまた、伝統的な性秩序の遵守を強調し、性教育を狭く異性愛結婚へと水路づける教育へと限定し、そのことによって、ホモセクシュアリティをも否定し排除する側面を持っていると理解される。

さて、Ahrendt (1989) もまた、Borrmann (1989) にならって、性教育を「愛、セクシュアリティ、パートナーシップ、結婚および家族への教育と能力付与、「性パートナーシップ・家族適性」への教育」としてとらえて、次のように述べている。「性教育は、統一的な陶冶・訓育過程の構成要素として、人格発達の直接セクシュアリティと関係する局面に向けられているばかりか、世界観的、政治的、道徳的、美的および身体的な陶冶・訓育と緊密に結びついて行われる。性教育は、性行動、性的パートナーとの関係およびパートナーシップ、結婚および家族への態度を社会主義道徳の意に即して導く道徳的価値体系の構築に向けられている」(796)。

このように、80年代に入ると、性教育の目標は、これまでのそれとは微妙な違いを見せ始めている。すなわち、言葉上は70年代の性教育の目標と同じく、社会主義教育の一環として、「愛、パートナーシップ、結婚および家族への準備教育」として述べられているものの、その力点はしだいに結婚と家族よりもパートナーシップのほうに置かれるようになっているのである。しかも、セクシュアリティにおける快樂機能が重視され、人格の幸福体験が重視されるにつれて、また後で見るように、ホモセクシュアリティが承認され受容されるにつれて、性教育の目標は、DDRの性教育学者が強く意識していないにせよ、狭い家族の圏域をも飛び越えていくことになるであろう。Bach (1989) は、自らの発言の重大さに気づいてか気づかずにか、「人格的な幸福体験は、子ども・青少年および大人を狭い家族圏域を飛び越えさせていく」(16)と述べている。

2. 性的健康の重視

第2に、生物・心理・社会的な統一態としての人間観が強調されるなかで、性教育においても、セクシュアリティが精神的な幸福と結び付けられて、「性的健康」という側面が追加され、重視されてくるようになる。そして、これが性教育目標におけるパートナーシップへの重点移動を押し進めたのである。

Grassel (1985) — その内容は基本的にはGrassel (1983) と同じだが — では、新たに健康教育との関連が付け加えられている。「性教育は健康教育としても理解されねばならない。それは精神衛生上、異性とのパートナーシップ関係を通じておよびこの関係のうちに、自分の人生とパートナーの人生を有意義で幸福なものとして高めることを見出す能力を発達させるのを援助するという重要な目標を持つ。それには、自分の性と異性の特色に関して、性関係の特殊な問題に関して必要な知識を装備していることが必要であり、また最後に結婚・家族生活のダイナミックさに関する知識も必要である」(198)。

「性的健康」を強調していたBorrmann (1989) もまた、これまでの「愛、セクシュアリティ、

結婚と家族への準備」としての性教育を言い換えて、「性パートナーシップ・家族適性への教育」と呼ぶことを提案している。というのも、「愛とセクシュアリティはとくに成長期にある者の生活の構成要素となっており、それらをマスターすることの援助がなされねばならないし、青少年にとっての性パートナーの一般的な問題のほうがまずもって結婚・家族問題に対して優位」(48) だからである。つまり、Borrmann は、家族適性を問題にしている点では 70 年代の性教育とは連続しているが、しかし性パートナーへの教育をもっと強調することで、青少年が「自分の性と性パートナーとの出会い」や「調和し安定したパートナーシップづくり」(49) ができるといった性的健康の側面を重視するのである。

Sende (1989) もまた、まず社会主義教育の目標を、成長期にある世代を「全面的にかつ調和的に発達した健康な人格」(13) へと教育することととらえている。ここで注意すべきは、70 年代の「全面的にかつ調和的に発達した人格」の形成という教育目標に、80 年代になると健康重視の観点から「健康な人格」の形成が付け加わっていることである。それだけではなく、健康教育と性教育との相互関係も強調されている。1つは、パートナー関係と健康との関連である。肯定的なパートナー関係からは人格的・個人的な幸福、学校、職業および社会の任務を果たすための励ましと力が生じるのに対して、男女間の失敗した出会いは、両パートナーの心理的負担となり、人格の達成能力と健やかさ (Wohlbefinden) 全体とを損ねるような葛藤にいたる。この点で、健康、健やかさと達成能力、健康教育の関心事と性教育の目標との間には緊密な相互関係が存する。もう1つは、健康教育と性教育が、若者に性感染症の予防にも適うような性衛生的な行動を形成するという共通の目標をもつことである (16)。だが Sende はすぐにこう補足している。両者の間にこうした共通性があるとはいえ、性教育は社会主義教育・共産主義教育の比較的自立した部分領域であるから、この共通性も社会主義陶冶・訓育構想のうちにしかりと礎を下ろしていなければならない (ebd.)。言い換えれば、「人間の性行動」は、「その人の社会主義的生活様式の構成要素」であって、「その全行動は自然に条件付けられ、社会的に決定され、文化的・教育的に形成され個人が責任を負うべきものである」(16-17)。

以上の前提から、Sende は、性教育の目標を従来通り「青少年をもっと効果的に教育と自己教育を通じて愛、パートナーシップ、結婚と家族へと準備させること」(13-14) ととらえ、その機能を以下の2点に求めている。すなわち、「成長期にある世代に、社会的に必要な性知識を社会主義的普通教育の構成要素として伝達すること」、「性的なものに対する態度と信念を教え込んで (anerziehen)、自分の性と異性とに対する社会主義道徳にふさわしく自制的な行動を意識的に形成すること」(17) である。ここに見られるように、Sende にあっては、性教育において社会主義道徳にふさわしい自制的な行動の形成を求めるとともに、異性愛を前提としていて、ホモセクシュアリティの問題を — Sende は、後に見るように、性教育の課題として一応挙げてはいるものの — 意識していないのである。

3. セクシュアリティにおける快樂の重視

第3に、80年代にはセクシュアリティが広くとらえられるようになり、それとともに快樂の側面がますます重視されるようになる。先に見たように、Borrmann (1989) は、生物・心理・社会的統一態としての人間把握から、セクシュアリティをもそうした統一態という視点からとらえるなかで、「心理的主観的に快樂体験として感じられる、生物的・衝動的な快樂欲求の充足」の側面を指摘していた。また Grassel (1983) も、社会主義パートナー関係の特徴として、男女同権、単婚、パートナーに対する忠実、相互に対する責任の承認と実現、成長世代に対する大人世代の責任と並んで、「快樂機能が肯定される親密関係」(165)を挙げている。さらに Bach (1989) もまた、快樂の局面の重要性を指摘して、次のように述べている。「快樂局面の強調は、われわれの性教育実践では、しばしばなお少なすぎる。しかしそれは、セクシュアリティの人間特有の性質を分かりやすく解説しすべての許容できない狭隘化を克服するためには必要である」(20)。

他方、Friedrich (1984) は社会心理学的見地から、セクシュアリティの機能を本質的機能と副次的機能に分けて、以下の6つを挙げている。すなわち、まずは本質的な機能として、生殖機能、快樂機能、パートナーを幸福にする機能、次いで副次的な機能として、コミュニケーション機能、パートナーを取り替えたい願望、緊張軽減機能を挙げている (93-95)。

4. ホモセクシュアリティの受容

第4に、セクシュアリティにおける快樂の協調と絡んで、ホモセクシュアリティについても、80年代半ばには、もはや病気でも性の逸脱や誤った行動としてではなく、肯定的に受け止められ性教育のなかでもきちんと扱おうという姿勢に変わってくる。

画期的にも、専門雑誌『学校の生物 (Biologie in der Schule)』1985年12月号に初めて、「ホモセクシュアリティ」に関する論文 (Bach 1985b) が掲載された。これは、1985年6月に開かれた第1回ワークショップ「ホモセクシュアリティの心理・社会的局面」を受けて、主催者の1人でもあった Bach が書いたもので、そこで採択された決議「結婚・性相談所におけるホモセクシュアルの相談・助言について」でのホモセクシュアリティ理解がもとになっている (このホモセクシュアリティ理解については、池谷 2013 参照)。ここで、Bach は人口の5%はいるとされるホモセクシュアルな市民を社会主義社会へ統合するという視点および約20%はいるとみられる思春期の「いわゆる発達期のホモセクシュアリティ (Entwicklungshomosexualität)」(490)の視点とから、男女にみられるホモセクシュアリティを、ヘテロセクシュアリティと同様に、「人間のもとに生じる性のヴァリエーションの1つ、すなわち同性の人物に対する心理的・性的傾向である」(486)ことを承認している。しかも、この「性愛的 (erotisch-sexuell) 指向」は「人格の一つの固定した構成要素」(490)であって変えることができないし、その人の性格や他の人格の質とは関わりがないし、この指向を超えるような、もっぱらホモセクシュアルだとみなされる典型的なメルクマールや行動様式は存在しない。「ヘテロセクシュアリティとホモセクシュア

リティとは、客観的には人間の性行動の2つの同価値のヴァリエーションであり、道徳的に価値評価することはできないものであり、それ自体良くも悪くもない」(486)。したがって、「ホモセクシュアリティは病気ではないし、癖(Angewohnheit)でも、罪でもない。それは、ある人格の固定した構成要素であって、これを選ぶことも防ぐことも変えることもできない」(ebd.)。このように、Bachはホモセクシュアリティをもはや性的逸脱としてはとらえずに、性的指向の一つであり、人格の固定した構成要素であって、変えることができないものであり、道徳や病気とは関わりのないものとしてとらえ切るのである。

また、ホモセクシュアリティの発生原因についても、はっきりとはわからないと明言している。さまざまな仮説(Bachは名前を明示していないがDörnerの妊婦のホルモン調節障害説⁷⁾や幼児期における親の位置関係説など)は証明されていないし、いわゆる「誘惑仮説」も証明されていない。「ホモセクシュアルな市民を固く社会主義社会へと統合するというわれわれの目標にとって、病因を知ることは前提ではない。つまり、われわれの性教育の活動はセクシュアリティに対するわれわれの世界観とわれわれ自身の態度とにもとづいている」(490)。

そして具体的に性教育では、まず下級段階で、例えば郷土誌のドイツ語授業で、人間のセクシュアリティのテーマ全体を「脱タブー化」して、偏見のない事柄に即した議論ができるようにしていくこと、そのうえでホモセクシュアリティについての正確な知識を、第8学年から、しかも「人間のセクシュアリティ」という文脈から切り離さずに伝えることを勧めている(491)。

Bach(1989)でも、ホモセクシュアリティが肯定的に受容されている。「時は、今やついに愛を男女関係としてとらえる見解の狭さを克服するまでに熟している。ホモセクシュアリティもまた、性的リラックスのために同性のパートナーを好むというもの以上である。それは、ヘテロセクシュアリティとまったく同じように深い情動的な感覚であり、愛に溢れた優しい好意、人間的な巢の暖かさ、保護と援助への憧れであり、社会的安心・安全、愛のパートナーシップにおける信頼と安心への要求であり、それはしっかりと人格構造のうちに礎を下している」(17)。しかし、先に見たように、教育現場ではホモセクシュアリティ問題を回避し、ホモセクシュアルだと思っている生徒の不安感情を強めさしている。そこで、偏見が構築される前に、ホモセクシュアリティについて、家庭と学校で第8学年からはじめて伝達するのではなくて、小さい頃から、すなわち、子どもが愛とセクシュアリティに対して関心を持ち始めるときから伝達する必要があるし、ホモセクシュアリティ理解のための教員の継続教育が必要だとしている(ebd.)。また優先的な課題として、「教員の知識を広げて彼らの態度をわが人道的な社会主義原理と一致させるための、教員の継続教育」(18)を挙げている。

第4節 80年代性教育の総括

以上のように性教育の目標と内容がしだいに変化する中で、80年代には性教育はどこまで到達したのだろうか、また同時にどのような問題を抱えていたのだろうか。ここではその到達

点と問題点を、Bach, Starke, Sende の3人に依りながら明らかにしよう。

1. Bach の性教育総括と課題提起

Bach (1989) は DDR における性教育を「かなり前進した」とみて、以下のように肯定的に総括している。「より多くの教育者は彼らの生徒の教育効果のある会話のパートナーになっている。より多くの授業外の催しが教授プラン教材を補充している。より多くの親は彼らの成長期にある娘と息子に有益な助言を与えている。より多くの医師と保護司は教員継続教育と生徒との活動で学校を支援している。より多くの結婚・家族・性相談所は性教育を活発にしている。何人かは乳児の世話、性衛生および避妊の知識を伝達しているだけではないコースを設けている。同様に、いくつかの学校、ピオニールの家、およびドイツ自由青年団の相談センターには料理、仕立て、家事 (Hauswirtschaft) のサークルがある」(21)。

その上で、性教育の今後の課題として、AIDS 問題、 快楽の局面の強調、 一面的な生物学化の克服、 生物の教授プラン案の改善を挙げている。 と についてはすでに触れた。 では、性教育にある「一面的な生物学化」を克服して、「情動的な成分、感情の教育」(21) をもっと視野に入れる必要性が強調されている。「われわれは、性教育のうちにある一面的な生物学化を克服するよう努力している。われわれは社会科学と芸術の教科のわが教員の責任ある準備を高めよう、そうすれば彼らはこれまで以上に、教授プラン教材の現在の性教育のポテンシャルを教育効果のあるように開発することになる。このことは同様に下級段階と授業外活動にもあてはまる」(21-22)。

では、段階的に 1990 年までに導入される新たな生物の教授プラン案 (1987 年) をめぐる問題点がいくつか指摘されている。その 1 つは、Bach によると、専門雑誌でこの草案をめぐって論議されているが⁹⁾、Erwin Günther をのぞいては医師がこの論議には参加していないことである。その理由を示唆する 1 つのエピソードとして、Bach は、下級段階教員の性教育での継続教育に関する Harald Stumpe の経験報告が教育 (学) 雑誌の『下級段階 (Unterstufe)』によって拒否されたという事件を挙げている (22)。

第 2 の問題点は、生物教授プラン委員会が、現在までに確保されている性科学、性心理学および性教育学の認識水準を教授プラン案へと組み入れていないことである。具体的には、 授業外での性教育の機会がもっと取り上げられること、 第 8 学年ではじめて「思春期における性的成熟の形成、女子と男子における性的成熟の性徴と兆候、成熟発達の開始、持続と終結の間の違い……」(教授プラン案) に習熟させるとはなっていないこと、 18 歳以下での中絶率が高く、討論過程でも生物教員がたびたび指摘しているのに、中絶問題が何ら問題とされていないこと、などが挙げられている (22)。

2. Sende の総括と課題提起

Sende (1989) は、社会主義教育構想の観点から、性教育の理論的・実践的な達成状況を包括

的に総括している。その際達成状況を、社会主義性教育理論の現在の発展状況、社会的な教育諸勢力（教員、親、医師、子ども・青少年組織の幹部、健康教育の指導員）の性教育活動と、子ども・青少年の性的陶冶・訓育の目標と任務を実行する際のその効果、女子と男子の性知識と性的関心、成長期にある世代の性倫理的態度と行動様式、の4つの観点から分析している。

に関しては、「理論的基礎はかなり発展し」、次の点で研究成果がみられたとしている（17-18）。

- ・青少年の性教育の基礎（性的陶冶・訓育の目標、任務、内容、方法および組織形態）
- ・性教育の任務を果たすように社会的教育勢力に能力を賦与すること
- ・とくに個々の学年段階での生徒の性的教授
- ・上級学校における性教育の計画化
- ・生物の授業における、授業方法上の性のテーマづくり
- ・生徒の性的陶冶・訓育における教具の効果的な利用
- ・性教育の医学的・衛生学的な問題
- ・性教育における教員の養成・継続教育

しかし、その一方では、緊急な調査研究を必要とするたくさんの「白紙のところ」があるとして、以下の点が挙げられている（18）。

- ・人格発達の生物学的・社会的・心理的諸条件の統一の視点からみた性的発達
- ・社会主義における個人の自由と責任の発達の局面のもとでみた人格の性行動
- ・若者の性教育に対する青少年・子ども組織の貢献を定めること
- ・ホモセクシュアリティの問題および障害のある青少年のパートナーシップの問題

ここで Sende は、Bach とは反対に、性教育理論における性倫理規範の決定的な意義を強調している。DDR では、婚前性交は、深い感情の好意、共通の関心と見方およびより長く続く恋人関係为前提として、人格を促進するように作用するならば道徳的に是認されうるという基本的規範を発展させてきた。しかし、この規範はもっと具体化される必要があるとして、青少年のパートナーの流動性を Sende は拒否している（18-19）。

に関しては、広範な肯定的な経験が見られ、それが一般化される必要がある。とくに性教育の担い手に関して、以下のようなポジションが浸透したとしている（20-21）。

- ・成長期にある世代の性教育はすべての社会的教育勢力、とくに家庭、学校、青少年・子ども組織および青少年健康保護の共同任務である。
- ・家庭と学校は青少年の性的陶冶・訓育の主要な担い手であり、両者はこれに関して緊密にコーディネートして協力しなければならない。しかし現在まだ多くの親が、性教育の任務を十分には果たすことができていない。これは、性的陶冶・訓育の内容、時期および方法に関してまだはっきりわかっていないせいである。これらの親は学校による援助と指導を必要としているが、親の夕べと親セミナーは、支援の適切な形態である。
- ・学級担任は上級学校においては自分の学級の生徒の性的陶冶・訓育の責任を持った組織者で

ありコーディネーターである。学級担任はその学年で授業をしている教員、とりわけ生物と国家公民科の教科教員と緊密に協力している。

- ・生物の教科教員は、その教科の特殊性から生じてくる性教育特有の任務を果たさねばならない。しかし生物の教員は一人では性的陶冶・訓育とそれと結びついた任務を学校において果たすことはできない。
- ・陶冶・訓育労働の計画化に当たっては、生徒の性的陶冶・訓育はまだ不十分にしか考慮されていない。例外をなしているのは、教授プランに明確な性教育の要求が含まれている学年段階での生物と国家公民科の教員の教材配分プランである。しかし教員養成における性教育の準備が不十分なために、教員はしばしば生徒の性的教授における内容、範囲、方法および組織形態について、はっきりわかっていない。それでも学級で個々の生徒に性の問題が出てくると、あるいは教員に対して明確な要求が出されると、たいていの教員は価値ある教育労働を行なっている。
- ・青少年・子ども組織は、たまにしかピオニールと自由ドイツ青年団のメンバーの性的陶冶・訓育を支援していない。現在もまだ生徒への性教育の働きかけのたくさんの機会が友愛ピオニール指導者⁹⁾やピオニールグループ指導者によって利用されないままである。友愛ピオニール指導者の政治・科学教育を高めることが、この欠陥を克服するのに貢献する。
- ・思春期医はその性教育の任務を学校からの求めに応じて引き受ける。性教育に関する催しは教員と思春期医が、年齢適性と陶冶と訓育の統一という原理が遵守されるように、共同で準備しなければならない。自分のイニシアティブによって、思春期医はもっとずっと効果的に、教育の担い手が性教育の能力を身につけるように貢献することができる。
- ・教育実践の示すところでは、校長が性教育の問題にそれにふさわしい注意を向ける上級学校では、教員と教育指導者は他の社会的教育勢力と協力して多様な性教育活動を展開している。

のうちの性知識に関していえば、性的教授は計画的に、体系的にかつとりわけ年齢と精神的成熟とに合ったかたちで行なわれねばならないが、個々の学年段階での女子と男子の性の基礎知識の内容と範囲について、これまで詳細な水準段階がまだ規定されていない。Sendeは、普通教育総合技術上級学校修了までに獲得しておかねばならない社会的に必要な性的な基礎知識として、以下の性知識を挙げている。a) 生殖器の解剖学、生理学および衛生、b) 自分のおよび異性の精神物理的な発達、c) 受精と胎児の発育、d) 妊娠と出産過程、e) 新生児とその世話、f) 身体的な奇形、精神異常、g) 性病の種類、他の性器の病気とその予防、h) 避妊と妊娠中絶に関する法規定、i) 性的異常、性犯罪の条件と原因、DDRにおける子ども・青少年保護、j) 男女同権、母子保護の法規定、k) 仲間関係 彼氏・彼女関係 愛 結婚、l) 若い結婚の問題 わが国家の社会政策的な措置による若い結婚の物質的支援、m) 社会主義家族における生活 DDRの家法、n) プルジョア二重道徳の影響の害悪、の14項目である(22-23)。

その上で、Sendeは、60年代以来行なわれてきた第5～10学年段階の生徒の性知識に関する経験的調査研究から、「女子と男子の性的な基礎知識は一般的につねに質的および量的に改善さ

れてきた」(23)と評価している。それは、性器の正確な名称と人間の身体におけるそれらの位置に関する生徒の知識、自分の精神物理的発達と異性のそれに関する具体的な観念、受精、胎児の発育、出産過程、新生児とその世話に関するより詳細な知識、母子保護の法的規定およびわが社会主義国家による若い結婚の支援についての社会政策的な措置に関する詳細な知識にみられる。こうした肯定的成果の要因として、教授プラン、とりわけ生物の教科におけるそれがいっそう開発されてきたこと、上級学校における性教育の任務に対する教員の準備が改善されたこと、さらに教員に、性教育領域での研究成果をつうじて、上級学校における性教育のプロセスの指導に関して、ますます具体的で効果的な勧告が与えられたこと、教員用の適切な性教育文献と子ども・青少年用の啓発文献の用意、が挙げられている(23-24)。

しかしその一方では、とくに欠けている知識領域がある。Sendeらが行った1985/86年の第8~10学年での生徒調査研究によると、「妊娠の認知と予防、性感染症とその予防」(24)の領域である。その後、Sendeらが行った1988/89年の第8学年と第10学年の女子と男子の性知識調査では、後者に関する性知識は相当改善されている。ほぼ80%の女子と男子が、性病の種類、危険および予防可能性に関してよく知っているし、第10学年では、この知識はもっと高かった(平均して85%)。これは、Sendeによると、明らかにAIDS予防に関する学校での啓発活動の結果である。これに関連して第8学年と第10学年の女子と男子のコンドームに関する知識もまた改善されている。ただ、第8学年と第10学年の女子と男子が避妊に関しても性病に関してももっと多くの情報を望み、50%がこの情報を医師から得たいと望んでいる(24-25)。

の青少年の性行動については、とりわけライプツィヒ青少年研究中央研究所とマグデブルク医学アカデミーでの青少年の性・パートナー行動に関する社会学および教育心理学的調査研究の成果が肯定的に確認されている。青少年の性・パートナー行動は、圧倒的多数が社会主義道徳の諸原理に適っている。それは一般的に「ノーマル」、健康であり、青少年に学校、職業および社会的生活で寄せられる信頼、そこで彼らに社会がゆだねる責任は、異性に対する責任意識ある行動・態度においてもパートナーシップ関係づくりにあっても、若き社会主義人格に値いするものである。青少年の多数はきわめて早くから異性との関係(親密な性的接触も含めて)を結び、婚前性交がほとんどすべての男女の青少年に許容されている(28-29)。

だがその反面、問題行動も見られる。それは、青少年の一部にみられる妊娠に対する一定の軽率さである。その結果が、青少年の性的活動・活発さと不十分な避妊とのミスマッチから生じる若い女子での望まない妊娠となる。Sendeによると、青少年で母親となるケースが毎年、15歳で約200件、16歳で1000件、17歳で4000件あり、妊娠や中絶での健康上のリスクは彼女たちでは年長の年齢層よりも有意に高い。妊娠の約25%は、合法的な中絶で終わる。18歳以下の青少年女性の妊娠中絶の割合は12~13%で、14~16歳の女子で微増している。もう1つは、15~18歳の年齢グループでの性病の増加である。他の年齢グループでは男性の割合が高いのに、このグループでは、男性と女性の比率は1:3.5で、10万人当たり620人の病人がいる。Sendeによると、性病の現在の広がり、これに関する啓発活動、とくに子ども・青少年の性倫理教育

の枠内でのそれがないがしろにされたことによって助長されているし、他方ではアルコールの濫用やパートナーを十分に知らずに軽率に性的接触していることによる (29-30)。

最終的に、Sende は性教育の現況を以下のように要約している (31-32)。まず肯定面は次の点である。

- ・若い人の性的陶冶・訓育は最近 10 年のうちにずっと早くから行われるようになり、すでに就学前期に始まり、学校期とそれに続く年齢段階で継続されている。
- ・性的陶冶・訓育は、ますます能力のある社会的な教育勢力によって行なわれるようになり、その結果隠れたしばしば不潔な情報源が減っている。
- ・性的陶冶・訓育は今日上級学校の卒業生に、高度の普通教育と全面的な人格発達の構成要素として、与えられている。
- ・上級学校を修了してから職業専門教育を受けたり拡大上級学校やアビトゥアのある職業専門教育を修了した青少年に、性的陶冶・訓育が継続されている。これによって青少年期と大人期との間の段階での性教育が確保されている。
- ・性的陶冶・訓育は、「不安・抑圧教育 (学)」から、共産主義的全体教育の内在的な構成要素として実現される「情報・オリエンテーション教育 (学)」へと大いに発展している。
- ・すべての社会的な教育勢力は、性教育の任務を良心的に果たしそこで緊密に協力する用意ができています。

その一方で、性教育でもっと強く考慮しなければならない問題として、以下の点が挙げられている。

- ・子ども・青少年の発達過程と体系的な性的陶冶・訓育との関係。性的陶冶・訓育は学校ではまだきわめて頻繁に生物の教科だけで行われている。
- ・生徒の性的教授で重要な内容上の重点、例えば避妊、性感染症およびホモセクシュアリティといった重点がしばしばあまりに表面的に組み入れられている。
- ・教員養成と継続教育における性教育のいっそうの発展について、人民教育省中央専門委員会・健康教育が提案を作成すること。

最後に Sende は、性教育のいっそうの発展のために必要なこととして、次のことを挙げている。子ども・青少年の性的陶冶・訓育において達成さるべき水準段階を第 10 学年までの全体視点から、幼稚園、下級段階と第 4 学年、中級・上級段階に関して規定すること、性生物学的な知識伝達と性倫理的訓育との統一が、パートナーシップ、結婚および家族への価値定位と強く結びつけられること、とくに人間が授業の対象となる第 8 学年での教授プランにおいて、性教育のポテンシャルを十分に汲み尽くすこと、生物の授業だけではなく授業外の性教育の継続、養成教育・継続教育において教員と教育指導者の性教育の能力を付けること、自分の子どもに性教育の任務を果たすために親の資質を高めるなど (32-33)。

3. Starke の性教育総括

ところで 80 年代（とりわけその後半で）の性教育を進める上で、大きな役割を果たしたのが、健康教育国民委員会であった。この第 8 回会議ではじめて、研究グループ「性行動の影響」が、Starke, Ahrendt と Bach の指導下で活動し (BZgA 1995 : 53)¹⁰⁾、さらに第 8 回会議の後に、健康教育国民委員会に Bach と Stumpe の指導の下で恒常的な研究グループ「性教育と性行動」がつけられる。その目標は住民のすべての年齢段階と特別グループに関する現存する性科学研究成果を評価することにあった (ibid.: 33)。このグループはその後 1990 年に創設される「性科学協会 (Gesellschaft für Sexualwissenschaft e. V.)」内部の積極的な下支えをすることになる (Bach/Stumpe/Weller 1993 : 5)。また、この研究グループは、イエーナ大学の性医学研究所と共同で「子どものセクシュアリティと人格発達」というテーマに関するシンポジウムを統一の混乱のさなかに準備し、1990 年 10 月 18~19 日に開催している。その成果が Bach/Stumpe/Weller (1993) である。しかもその短い存続期間に、この研究グループは、いくつかの勧告を、例えば「障害者のセクシュアリティ」と「ホモセクシュアリティ」の問題領域に関して作成したりしている (BZgA 1995 : 54)。

Starke のまとめの報告 (1989b) によると、研究グループ「性行動」での討論のなかで、次の 5 つの主要路線 (Hauptlinien) が確認され強調された (205-207)。

1. 性教育、性相談および性セラピーは、多くの担い手——すなわち、家庭、学校、青少年団体、職業教育、Urania、健康教育センター、結婚・性相談所、保健所、マスメディア——の協働を必要とする、複合的な任務である。その際、青少年にとって特別な啓発資料、例えば、避妊、妊娠、最初の性交、ホモセクシュアリティ、婦人科医のところでは妊娠中絶、妊娠中の性行動、出産後の性行動、性病、AIDS といったテーマに関する資料が自由に手に入ることが必要だし、これらのテーマに関する専門映画も必要である。
2. 青少年女性の健康・性行動、パートナーの流動性に関する青少年研究の成果、成人の母親の間での調査研究、出産後の若い母親の性行動、中絶と中絶患者に関する調査研究結果など、青少年の性行動に関する研究成果が実践的な勧告と結びつけて示された。
3. 青少年の性行動に関するたくさんの背景情報が提供され、セクシュアリティの生殖機能の諸局面が考慮された。
4. AIDS 問題については、AIDS 撲滅の肯定的な緒口が危険とリスクと同様に挙げられ、AIDS を不適切に前景に置いたりパニックを広めたりせずに、AIDS について正確にかつオープンに情報を与えねばならないことで一致がみられた。その際重要なのは、AIDS 現象の医学的・ウイルス学的、心理学的、社会学的、倫理的、法的その他の側面を考慮することで青少年の質問に答えることができるし、彼らに彼らのパートナー関係をつくるさいに安心・安全を与えることである。
5. 青少年の性教育の実践的な諸経験を分析し、科学的に精選すること、また性科学研究を推し進めることが必要で実り多いものである。成長期にある者を、すべての生活領域において、

愛とセクシュアリティにおいても、責任意識を持って行動し、パートナー関係づくりに必要な知識をも獲得する人格へと育て上げることは、絶え間ない教育任務である。その際有効なのは、青少年のさまざまな年齢・活動グループ、男女のグループ、さらにまた若い母親、中絶患者、若い家族といったさまざまな目標グループ、さらにまた病気にかかり危険にさらされた人々、これらの人の特別な前提、関心および質問を考慮した、細分化した性教育である。

その上で、Starke はこう確認している。「愛、セクシュアリティ、パートナー関係、家族はわれわれの社会では、高いそして促進される価値であり、そしてそれらは青少年の個人的な価値ヒエラルヒーにおいても高いランクを占めている。愛とセクシュアリティは青少年の人格発達のかきわめて重要な要因であり、彼らの人生・生活の喜びと人生の方向に貢献する。社会は若いパートナーの愛情関係を受け容れ、それどころか、この関係を保護するのにあらゆることを行う。これは同時に青少年、人間の幸福、人間的関係を促進することである」(207)。

第5節 80年代における性教育の問題点と課題

以上の議論をまとめてみると、まず気づくのは、60～70年代の性教育において確認されてきた基本的な構造と、青少年における性教育の成果が肯定的に評価されていることである。その上で、問題点を挙げるならば、第1は、学校においては性教育が生物の教科に集中することで一面的に生物学化していて、性教育における感情の教育の側面が軽視されていることである。また第2の問題点は、妊娠や避妊、AIDS・性感染症、ホモセクシュアリティといった問題群が性教育において取り上げられるとしても、まだ表面的になっていることである。

これに関連して、新しい生物の教授プランの問題点が挙げられる。これが第3の問題点である。その1つの大きな問題は、70年代にも性の問題を取り上げるには第8学年では遅すぎると指摘され、改善要求が出されていたにもかかわらず、相も変わらず第8学年ではじめて思春期の性が取り上げられていることである。もう1つの問題は、第8学年の教授プランが青少年の実態と課題に即したものになっているかどうかということである。

第4の問題は、生物の教員だけではなく、すべての教員の力量を高めることが求められているのに、教員養成や継続教育において性教育に関する能力を高める努力がなされていないことである。1973年の中央継続教育プログラムにおいては、「特別コース性教育」は定められていたが、1977年のプログラムではそれが削除されたし、80年代には新たな大学学習・研究プラン(Sutienpläne)が導入されたものの、あいかわらず独自の性教育学は存在しなかったのである(BzgA 1995: 32)。そこで、Sende (1989)は人民教育省が教員養成と継続教育における性教育について提案するように求める一方で、Ahrendt (1989)やStumpe/Günther (1988)らは、教員の継続教育をとおして性教育の担い手の養成を行なおうとしている。

第5に、性教育では学校とさまざまな社会的勢力との協力・コーディネートが必要だと認識されているのに、とくに子ども・青少年団体の性教育に対する関与が不十分だという問題が指摘さ

れている。

以上の問題点のうち、ここではとくに第3の問題を取り上げ、80年代における性教育の問題点を浮き彫りにしておこう。その際、第4の実践を先に取り上げ、その後で第3の問題に立ち戻ることとする。

1. 教員の養成と継続教育

(1) Stumpe/Günther (1988) の継続教育実践

Stumpe/Günther は、現行の結婚・性相談所作業指針（1968年1月8日）における結婚・性相談所の任務の1つである性教育への協力の一環として、教員の継続教育における性教育に取り組んでいる。

その際、Stumpe/Günther は性教育の現状と課題を次の点に見ている。1つは、DDR では他の社会主義国においてと同様に、性教育をつねにその統一態において、愛、パートナーシップ、セクシュアリティ、結婚と家族への準備と見なし、重要な構成要素として陶冶・訓育過程へと組み入れるとされているのに、実際には、「しばしば性教育はまだその内容上の複合性において実現されず、生物学的啓蒙としてかあるいは「人差指をたてて (mit erhobenem Zeigefinger)」行なわれる道徳化として理解される」(37)。2つには、授業外における性教育の催しでの子ども・青少年との取り組み経験から、「何人かの教育者には、とくに人間のセクシュアリティの具体的な質問に関して自分の生徒とオープンに話すのに留保と気後れがみられる」ことである。3つ目に、子どもはすでに就学前期に性的内容を持った質問をしてくるから、性教育は、下級段階で始まり、継続されていかなければならない。したがって、「性器の構造と機能、受精、生殖 (Zeugung)、出産前の発育と出産に関する原則的な知識は、第3~4学年で伝えられて、青少年期におけるかかる質問と問題を解決するための好都合な前提をつくり出さねばならない」(ebd.)。最後に、青少年研究中央研究所の調査によれば性交年齢が早まっているから、青少年を家庭と学校での信頼にみちた会話をつうじて、最初の性的関係に対する責任へと準備させること、すなわち、「彼らと適時に避妊の可能性について話して、望まない妊娠、したがって妊娠中絶を (.....) 防ぐこと」(38) が必要である。

こうした現状認識から、Stumpe/Günther はイエーナの郡教育指導センター (pädagogisches Kreiskabinett) と共に、下級段階教育者向けの1年間の継続教育コースを構想し、実施している。そこでの目標は次の3つであった。すなわち、性科学研究から得られた知識の伝達、教育者に性教育への積極的な能力をもっとつけさせること、子ども・青少年を愛、パートナーシップ、セクシュアリティ、結婚と家族へと最大限準備させること、である。そのために以下のような2時間もの催しが計7回開催されている (38)。

第1ラウンド：継続教育サイクルの目標設定についての助言・相談
 予定される催しの内容と方法についての説明
 AIDS — それについて何を知らねばならないか？

第2ラウンド：第1ラウンドの教材の復習

年齢に応じた性教育の教育構想

共産主義教育の構成要素としての性教育，下級段階における内容と方法（年齢に典型的な質問，典型的な性行動，内容上の重点，視聴覚教材，親の取り込み，テーマに即した親のタペ）

第3ラウンド：第2ラウンドの教材の復習

DDRにおける人口学的発展と世界人口の発展

第4ラウンド：第3ラウンドの教材の復習

子ども・青少年の身体的・性的発達，心理的・性的発達，体験と行動，性的成熟の加速化．生物学的成熟ないしは愛と親密なパートナーシップの前提としての社会的成熟

第5ラウンド：第4ラウンドの教材の復習

性病とその他の性感染症，その予防と撲滅

第6ラウンド：第5ラウンドの教材の復習

ホモセクシュアリティ（偏見の歴史，人間のセクシュアリティのノーマルなヴァリエーションとしてのホモセクシュアリティがあるいは病気としてのホモセクシュアリティ？，「カミングアウト」，治療はあるのか？）

第7ラウンド：第6ラウンドの教材の復習

DDRにおける結婚・性相談（任務と活動，子ども・青少年の性倫理教育での協力）．継続教育の催しの評価

(2) Ahrendt らの教員向け性教育実践

一方 Ahrendt ら マグデブルク医学アカデミーの産婦人科・助産クリニック性医学部門は，県の授業・継続教育教育指導センターと協力して，最初の特別講座「社会主義性教育」を1989年7月3～7日に実施している．毎日5時間，計25時間のプログラムで，ここには，マグデブルク県その他の県から36人（うち34人が生物教員）が参加した（Ahrendt 1989）．

講座開始前の調査では教員の意識は次のようなものであった．全教員は，子ども・青少年の性教育はきわめて重要であり，学校はこの教育任務に対しても責任があると思っているが，86%の教員は，学校におけるこの任務はまだ十分には考慮されていないと考えているし，73%のみがただ部分的にこれに関連した問題の解決のために生徒を教育する際の用意ができていた．教員になる研究期間での性教育への準備はただ一部しか行なわれていないか（36%），あるいはほとんどまったく行われていない（59%）．それでも全教員は性教育を彼らのこれまでの仕事の中で行ない，77%は教授プランで求められる教材以上のこともしていた．だが，教員の半数以上（59%）は，この種のテーマを話すのには自信がないと考えていた（796）．

プログラムの作成にあたって，その基礎とされたのは，大学・専門学校制度省における性科学委員会内の性医学部局が作成した教授プラン案「医学生向け性科学」，Ahrendt らが作成した教授プラン案「社会主義性教育」や，教職学生向け教育と親との取り組み活動での経験，Ahrendt の科学的調査研究結果および3500人以上の生徒の性教育ならびに青少年の個人的相談での経験，および講演その他の形で大衆科学的な啓発で獲得された経験と認識である（797）．

この講座の内容は以下の10のテーマから構成されている（797-799）．

テーマ1：性教育の任務と目標

・全社会的，学際的任務としての性教育

- ・ 共産主義的陶冶・ 訓育全過程の一部としての、子ども・ 青少年の人格発達の一部としての性教育
- ・ 個々の教育の担い手（親， 教員， 学校外の教育者その他）の任務
- ・ 性教育の内容（知識の伝達， 価値観と行動模範の伝達）

テーマ2：セクシュアリティと社会

- ・ 性的行動の社会的制約性
- ・ 社会秩序の変化の中にある道徳
- ・ 具体的な歴史的条件下での男女の役割
- ・ 社会主義社会における愛， セクシュアリティ， パートナーシップ， 結婚と家族

テーマ3：パートナーシップ， 結婚と家族

- ・ パートナーの理想観とパートナー選び
- ・ パートナーの人格に対する要求（性格， 外面その他）
- ・ パートナーシップと結婚における役割行動
- ・ 婚姻締結 — 葛藤の克服
- ・ 愛とセクシュアリティ — 一体性とは？

テーマ4：セクシュアリティの生物学的基礎

- ・ 性生理学
- ・ 障害のない性機能の特徴
- ・ 感覚器官とセクシュアリティ， 性感帯
- ・ 男性と女性での性生理学的興奮過程の段階

テーマ5：男性と女性の性的な行動と体験

- ・ マスタベーション
- ・ 愛撫， キス， ペットティング
- ・ 性交
- ・ 外性器的な充足形態

テーマ6：ホモセクシュアリティ

- ・ 社会とホモセクシュアリティ
- ・ セクシュアリティの生物心理社会的なヴァリエーションとしてのホモセクシュアリティ
- ・ カミングアウト
- ・ ホモセクシュアルな男性と女性の性的な行動と体験
- ・ 誘惑可能性のテーゼについて
- ・ ホモセクシュアリティと環境

テーマ7：子ども期における性的発達と性的問題

- ・ 子ども期における性的関心
- ・ 子どもの行動
- ・ 子ども期におけるマスタベーション

テーマ8：青少年期における性的発達と性的問題

- ・ 身体の変化と問題
- ・ 月経サイクルの発達と問題
- ・ 性心理的な発達（性的欲求および活発な性行動の発達， 性的活動の頻度と形態， 性心理的な体験と処理）
- ・ 青少年期における安定したパートナーシップ
- ・ 青少年と避妊（ホルモン避妊と子宮内避妊およびコンドーム — 種類， 働きの原理， 要件， 禁忌， 青少年の使用可能性， さらに避妊手段の価値， 基礎体温， クナウスーオギノ式によるリズム法， 性交中断その他）
- ・ 青少年と妊娠（青少年の母性の医学的・ 社会的・ 個人的問題， 合法性， 早期妊娠中絶の医学的および個人的な問題その他）

テーマ9：性病

- ・ 淋病， 梅毒， AIDS

- ・感染経路，徴候，治療，予防
- ・個人的な責任

テーマ 10：学校における性教育

- ・性教育の基本原則，方法および教授
- ・さまざまな授業科目，とくに生物科における性教育
- ・学級担任の時間，成年式準備教育，自由ドイツ青年団学習年¹⁾およびクラブ活動での性教育
- ・教員 - 生徒関係づくりについて
- ・親との取り組み活動について
- ・視聴覚教具での活動について

また，25時間のテーマごとの時間配分は以下のとおりである。

テーマ	時間数
1. 性教育の任務と目標	1
2. セクシュアリティと社会	1
3. パートナーシップ，結婚と家族	1
4. セクシュアリティの生物学的基礎	2
5. 男性と女性の性的な行動と体験	2
6. ホモセクシュアリティ	1
7. 子ども期における性的発達と性的問題	1
8. 青少年期における性的発達と性的問題	5
9. 性病	1
10. 学校における性教育	10
総時間数	25

以上の2つの教員の性教育に関する継続教育は，その対象者が異なるとはいえ，そこで共通しているのは，両者ともホモセクシュアリティの問題を独立した1つの項目として立てて，セクシュアリティのヴァリエーションとして扱っていることである。また Ahrendt においては，マスターベーション，ペッティングとともに避妊，妊娠中絶についても触れられている。

2. 生物教授プランと教科書の問題

これに対して，生物の教授プランや生物の教科書は，ホモセクシュアリティや避妊，妊娠中絶などをどのように扱っているのだろうか。

(1) 議論中の第8学年の生物教授プランの項目の構成と時間数を1969年のそれと比較してみると，以下のようになっている(表8)。

まず項目を見ると，1969年に「衛生の復習」があるだけで，基本的な項目は変わっていない。次にその順序を見ると，1969年版では「生殖と発達」の扱いが終盤に置かれているのに対して，1987年版ではもう少し手前に置かれている。さらに時間数を見ると，全体の時間数は60時間と以前と変わらない。ただし，性教育に関わる「生殖と個人の発達」は6時間から7時間と1時間だけ増えており，また「自由裁量の時間」が2時間とられている。

表 8 1969 年と 1987 年教授プランの比較

8 学年	人間の解剖学，生理学および衛生	時間数	人間の解剖学，生理学および衛生	時間数
	1. 導入 生物界における人間の地位	2	1. 高次に発達した生物としての人間	2
	2. 物質・エネルギー代謝 栄養と消化， 血液とリンパ， 呼吸， 細胞の物質・エネルギー代謝， 排泄，衛生	25	2. 物質・エネルギー代謝 2.1 栄養と消化 2.2 血液とリンパ 2.3 呼吸 2.4 細胞の物質・エネルギー代謝 2.5 排泄と皮膚機能	25 6 7 4 5 3
	3. 皮膚 構造，機能，衛生	3	3. 感覚・神経機能 3.1 感覚器官と神経系の協力 3.2 神経系の機能	14 7 7
	4. 運動と身体維持 運動・支持器官，筋肉の物質代謝，衛生	7	4. ホルモン	3
	5. 感覚・神経機能 被刺激性，目，耳，反射弓，脳，衛生	12	5. 生殖と個人の発達 5.1 生殖 5.2 個人の発達	7 3 4
	6. ホルモン ホルモン調整，血糖レベル	3	6. 身体維持と運動	7
	7. 生殖と発達 生殖器，胎児の発育，出産，親の責任	6	自由裁量の時間	2
	8. 衛生の復習	2		
		60		60

Autorenkollektiv (1973) ; Lehrplan Biologie (1987) より作成.

次に，直接性教育に関わる「生殖と個人の発達」の項目を見てみよう。まずこの単元の全体的な目標は，「人間はその生殖を意識的に操作できること，および人間のセクシュアリティは生殖に結びつけられているわけではないこと」を生徒に理解させるとともに，これによって同時に，「責任のある性的行動への教育」に貢献することであり，全体として「生徒をわれわれの倫理的規範にあった，彼氏・彼女関係，愛，親性および結婚への態度を教育すること」である。その際，教員には，以下のことに留意することを求めている。すなわち，「青少年期におけるセクシュアリティの問題がオープンに議論されねばならない」こと，クラスの状況を考慮しながら，教材の取り扱いの順序を決めること，である。

「5.1 生殖」は，大きくは人間の生殖，性器の構造と機能，月経周期，生殖の意識的コントロールその他，からなっている。それぞれで扱う項目を見ると，まずでは，「性交での精子細胞の移送（交尾），卵子と精子の合一（受精），受精卵の形成，受精卵の新たな個体への発育」，では，男性器で「睾丸，副睾丸 - 精子の成熟，精子の貯蔵，輸精管 - 精子の移動，腺 - 精液の形成；前立腺，尿道と海綿体のある陰茎（ペニス）の指摘 - 精液の放出；精子の構造」，

女性器で「卵巣 - 卵子の成熟, 卵子の卵管への放出 - 移動と子宮での受け入れ, 膣 (ヴァギナ), 陰唇, 卵子の構造」, では, 「ホルモンによる脳下垂体・卵子・子宮の協働, 子宮粘膜の成長と排出, 月経カレンダー, 月経衛生」が取り上げられている。では以下の項目を扱うとしている。「避妊, 例えば生物学的, 機械的, 化学的避妊手段」, 「生殖に結びつかない人間のセクシュアリティ, ホモセクシュアリティの指摘」, 「性感染症 - 認識, 保護, 申告義務」, 「ガン, 女性と男性の定期検診」, 「性器の衛生, 性の衛生, 頻繁にパートナーシップを取り替える危険の指摘」。

「5.2 個人の発達」では「受精した卵細胞からいくつかの発達段階を経て死に至る発達としての個人の発達」が扱われるが, 大きくは, 産前の発育, 出産過程, 産後の発育・発達が取り扱われている。では, 「産前の発育と妊娠の経過, 卵管での受精した卵子 (受精卵) の分割, 胚の子宮粘膜への着床, その後の卵子の発育のホルモン抑制, 妊娠の始まり」, 「胎児の発育, 卵膜の形成, 羊水による保護, 胎盤と臍帯の形成, 母体からの栄養補給, 内的器官と外形の分化」, 「妊娠7カ月以降の母体外での成長, 生活能力」, 「一卵性・二卵性双生児の指摘」と同時に, 「妊娠中の健康な生活態度に対する特別な要求, 身ごもった子に対する親の責任, 母子に対する社会の配慮, 妊婦に対する行動の指摘」が挙げられている。では, 「陣痛; 開口, 娩出, 後産; 臍帯切断; 血液中の二酸化炭素過剰による新生児の最初の呼吸運動; 新生児の吸飲反射; ホルモンの働きによって乳腺が機能することができること (乳の分泌); クリニックにおける出産監視の指摘」が扱われる。で扱われる項目は, 「乳児期, 幼児期, 初期学童期, 青少年期, 大人期, 死」が概観され, 「心身の発達に環境が及ぼす影響」, 「われわれの社会の諸条件の意識的な利用」, 「加速化の指摘」, 「青少年の発達 - 思春期における性的成熟の出現」, 「男女の性徴と性的成熟の徴候」, 「男女での成熟発達の開始, 期間および終結の違い」, 「青少年期における彼氏・彼女関係, 愛, パートナーシップ」となっている。

(2) この教授プランに対して, Borrmann (1987) は厳しい批判を加えている。「社会的に必要で生徒と多くの教員が期待していた, よりよい, 生物学にもとづいた性教育に関する蓄えの開発が明らかに断念された」と。それは, 「セクシュアリティ」という概念が放棄されて, 「生殖と個人の発達」という伝統的なタイトルが用いられていることにすでに表現されている。Borrmannによれば, むしろ「セクシュアリティ, 生殖および個人発達」というタイトルのほうが, 今日生きている人間を長い発達系列の分枝として示すばかりではなく, その人間の特殊性をも示すという, 第8学年における生物の授業の案件にかなっているであろう」(359)。

第2の批判は, セクシュアリティ概念の不使用と絡んで, 性における快樂の側面が扱われていないことに向けられている。それは, 性器のところでクリトリスと勃起が扱われていないことに示されている。しかし, 「成長期にある者に, 個人の生活と社会の生活において性的なものを価値評価することができるようにさせるためには, 彼らに, 人間のセクシュアリティは生殖に結びついていないと言うのみでは明らかに十分ではない。不可欠であるのは, 人間のセクシュアリティは快樂獲得へと目的を移し変えたということと同時に伝えることである」(360)。

第3に, 生殖の意識的なコントロールのところで, 避妊がそれだけで扱われていて, 「家族計

画や意識的な親性 (Elternschaft)」と結びつけられていないし、妊娠中絶の問題も組み込まれていない。

第4に、ホモセクシュアリティの問題が取り上げられたこと自体は「一つのかんりの進歩」であるが、この問題をコントロールされた生殖と結びつけるよりも、ホモセクシュアリティを、「ヘテロセクシュアリティと並ぶもう一つの性行動の形態」として示すことのほうがよいであろう (360)。そうすれば、「自慰 (masturbation)」や「ペッティング」も扱う機会も生まれることになる。

Neubauer (1988) もまた、Borrmann の提起を受けて、生殖とセクシュアリティ (社会的な性規範を含めて) の分離、クリトリス、勃起、masturbation およびペッティングを組み入れることを求めている。

(3) ではこの時期の教科書はどうなっているであろうか。第8学年用教科書 (Baer 1989; 初版 1982年, 1989年第8版) を Borrmann らの批判に照らしてみると、第1に、セクシュアリティの概念は、たった1か所、「青少年期と達成期」のところで用いられているだけである (「友情、愛、セクシュアリティの概念の内容に関して、クラスの仲間と討論しよう!」) (153)。第2に、快楽という概念は出てこないし、masturbation もペッティングも触れられていない。ただ「クリトリス」という概念は使用されており、「女性性器の神経がたくさんある刺激中心部」と解説されている。第3に、ホモセクシュアリティはまったく取り上げられていないが、妊娠中絶については「青少年期と達成期」のところで、家族計画と結びつけられてきちんと触れられている。「わが共和国の全市民は、結婚・性相談所あるいは医師のところで、彼らに適切な家族計画の措置について情報をもらう機会がある。それでも望まない妊娠がおこれば、女性の願いにもとづいて、遅くとも妊娠12週までなら、病院で妊娠中絶をしてもらうことができる」(154)。

このように、1989時点にあっても、生物の教科書では、セクシュアリティという概念もまったくと言ってよいほど用いられず、また性の快楽の側面についてもほとんど触れられずじまいであり、ホモセクシュアリティについてはまったく触れられていないといったありさまである。

おわりに — まとめにかえて

以上に見てきたように、80年代におけるDDRの性教育は、実践的には多くの問題を抱えていた。しかし60年代、70年代の成果を受け継ぎながら、性的健康という側面をWHOの成果にも学びながら重視していくとともに、セクシュアリティの意味と機能を広げて、快楽機能をより重視していくようになる。そして、人格の幸福体験が重視されるにつれて、ホモセクシュアリティも承認され受容されていくことになる。こうした一連の動きの中で、性教育の目標は、70年代の性教育で重視されていた異性愛と家族重視の方向をしだいに修正し、DDRの性教育学者自身がそうとは意識していないにせよ、もはや狭い家族の圏域にとどまることができず、それをも飛び越えようとしていた。その意味で、80年代におけるDDRの性教育は、70年代の性教

育を乗り越え、大きな一步を踏み出そうとしていたと言えるであろう。

例えば、壁の崩壊後の1993年に、Bachは80年代終わりに展開された性教育学の目標を次のようにまとめている (Bach 1993 : 83-84)。すなわち、

- ・自分の身体ならびに自分の性と異性の身体を知ること
- ・自分のセクシュアリティを罪悪感 (Schuldgefühl) なしに肯定すること
- ・他の性的指向を許容すること、他者の権利を擁護し、連帯性を展開すること
- ・古い役割ステレオタイプを問題にし克服すること、これは性的実現における同権と同等の義務を意味する
- ・セクシュアリティのうちに自分の生活とパートナーの生活の幸福の増大が見出されうること、および安心、誰かのためにいるという親密さへの要求、そしてまた信頼性、保護および忠実・貞節への要求がぜひとも展開され実現されうることを認識すること
- ・男女の同権および違った感じ方を承認すること
- ・家族計画についての情報が与えられ、避妊具・薬を用いること
- ・危険性、例えば、性的障害、性的虐待、暴力、性病、AIDS、妊娠中絶のリスクについて精通すること

ここでは、BachがSEDの軛から解放された後に彼の性教育のテーゼをまとめ直しているという点を差し引いたとしても、性教育の目標においてもはや結婚や家族はそれほど重視されていないことは注目しておいてよいであろう¹²⁾。

また、「男女間の清潔な関係」も80年代にはまったくと言ってよいほどに主張されなくなるのも、80年代の性教育の大きな特徴であろう。

だが、その一方では80年代における性教育は大きな課題をも抱えることになった。その1つは、セクシュアリティの機能と意味の広がりの中で、性的健康としての性教育と、生物を中心にした学校における性教育とをどうコーディネートするのかといった問題が浮上してきたことである。学校でいえば、生物での性教育と連携して、それ以外の科目での性教育がますます重要性を帯びてくるし、学校外での性教育もますます重視されざるをえないことになる。

もう1つは、公式に表明される性教育の目標そのものがホモセクシュアリティを受容するにつれて、大きな矛盾を抱えることになったということである。それは、DDRにおける性教育の中心的指導者の一人であるBachのホモセクシュアリティ論にもみることができる。Bach (1989) はたしかに、ホモセクシュアリティを肯定的に受容している。「時は、今やついに愛を男女関係としてとらえる見解の狭さを克服するまでに熟している」と。

しかし、この受容の仕方には大きな問題があった。第1の問題は、Bachは「愛、パートナーシップ、結婚および家族へと準備させるもの」として、男女関係と家族・生殖を前提にして性教育をとらえているのに、「時は、今やついに」という言葉で、まるで木に竹を接ぎ足すように、ホモセクシュアリティを受容し肯定しはじめていることである。生殖と関わらないホモセクシュアリティを肯定することは、必然的に青少年を結婚と家族へと準備させるというこれまでの性教

育の目標と齟齬をきたすことになるはずだし、何らかの目標の修正が迫られるはずなのに、Bachには——その矛盾に気付いていないのか、あるいは故意に無視しているのかはともかく——その矛盾とどう折り合いをつけるのかという問題意識がまったくと言っていいほど欠落している。このことは、Bachがこれまでのホモセクシュアリティに対する否定的態度を修正し出したのは、ほんの少し前、1984年の女性雑誌『あなたのために (Für Dich)』14号においてであったが (Brühl 2006 : 126)、そのことと無関係ではないであろう。

しかも第2に、ホモセクシュアリティに対する肯定の反面、ホモセクシュアリティに対する社会主義社会における差別そのものについては語られことはない。たしかにホモセクシュアリティに対する過去の差別については触れられているし、DDRの市民も根拠のない偏見を抱いていることも触れられている。「ホモセクシュアリティは生殖にとって、それゆえ社会の維持にとって必要ではない。こうしてホモセクシュアルなものは過去にはアウトサイダーの役割へと押しやられ、敵対的な階級社会においてマイノリティの運命を担わざるを得ない社会的な周縁グループになった。すなわち、誹謗、差別、迫害」(Bach 1985b : 487)。このように、ホモセクシュアリティ差別は、基本的に差別のない(とされる)社会主義社会とは無縁な、あくまでも過去の社会秩序の遺物の問題として扱われてしまうのである。もちろん、ここには表向きは「社会主義」体制を称揚しながらも、ホモセクシュアリティを受容していくという戦略もある程度は働いていたであろう、としてもである。これは、おそらく当時のDDRにおけるホモセクシュアリティ受容の基本的限界を示すものであろう(この点については、池谷 2013 で詳しく検討している)。

註

- 1) Partner では回答者は16~25歳の青少年2741人、そのうち16~18歳の青少年が1087人となっている。その概要をStarke (1980)に見ることができる。Partner では、16~30歳の青少年5669人が参加し、そのうち1087人が16~18歳である。その成果がStarke/Friedrich (1984)である。Partner では、参加者は16~48歳の青少年と大人、そのうち16~18歳の青少年は1391人となっている (Weller/Ahrendt 1993 : 81、なおWeller 1993 ; Friedrich/Förster/Starke 1999も参照)。現在Merseburg大学の教授となっているWellerは、2012年秋にPartner の調査を行っている (Wellerとの2012年9月4日の対話)。
- 2) Bach 1985a ; Bach 1988.
- 3) Ministerium für Volksbildung der DDR 1988.
- 4) 1961年に健康生活態度・健康教育委員会 (Komitee für gesunde Lebensführung und Gesundheitserziehung) が設立され、1969年に健康教育国民委員会 (Nationales Komitee für Gesundheitserziehung) と改称され、その任務はすべての組織と国家指導部に、それぞれの領域での健康教育のための勧告を出し、活動をコーディネートし、国家機関に、態度予防という意味での健康な生活のために必要な前提を作り出すことへの提案を仕上げることであった。1960年以降1988年までに、管見する限りでは、8回の健康教育国民会議が開催されている。
 - 第1回 1960年
 - 第2回 1967年10月19~21日 (Rostock)
 - 第3回 1969年10月30~31日 (Weimar)
 - 第4回 不明

第5回 1973年10月18～19日 (Magdeburg) 「社会主義労働文化と健康」

第6回 1977年4月 (Dresden) 「青少年と健康」

第7回 1983年10月11～13日 (Dresden) 「社会主義生活様式と健康」

第8回 1988年3月1～3日 (Dresden) 「青少年と健康」

なお、1971年5月24～28日には、国際セミナー「健康教育領域における拡大・継続教育」がDresdenで開かれている。また、1989年3月7～9日にはKelbraにおいて、健康教育国民委員会とハレ教育大学共催で、「青少年 性 健康」をテーマとした会議が開催されている (Wissenschaftsbereich Gesundheitserziehung 1989)。

5) Uraniaについては、池谷 (2011)、参照。

6) Misgeldはホモセクシュアリティに対して基本的に否定的である。Misgeld/Tosseti (1978)では、一方でホモセクシュアリティを「遺伝という意味においてはなく、母体内で発育する胎児の生殖腺の発達欠陥として」生得的なものだとして理解しているが、他方ではホモセクシュアリティを正当化してはならないとしていた (Grau 1995: 130より)。しかし、Misgeld (1980)になると、「生得的なホモセクシュアリティはいない」と言い、「ホモセクシュアリティの発生と維持の背後にはいつも、若者の教育においては解決されないままの問題が隠れている」としている。また、ホモセクシュアルが生命の再生産をできないことを問題にする。「現在の社会を作り将来の社会の前提を創り出すものという人間の役割は、その人の生殖の可能性——つまり生命を継承する能力——の利用を意識的に行為する人格の本質要素にする。これは同性の関係では周知のごとく不可能である」(90)。

7) DörnerについてはDörner (1976=1983)参照。Dörnerの問題点については、池谷 (2013)で検討している。

8) 例えば、Borrmann (1987)、Neubauer (1988)など。

9) 友愛ピオニール指導者 (Freundschaftspionierleiter) とは、総合技術上級学校で常勤している自由ドイツ青年団役員のことである。

10) 第8回健康教育国民会議の研究グループ「性行動の影響」では、以下の報告がなされている (Nationale Komitee 1989)。

・導入報告

Kurt Starke (ライプツィヒ青少年研究中央研究所) 青少年 性 健康

・Anita Weißbach-Rieger (フンボルト大学) パートナー選択を含めた青少年女性の健康・性行動

・Bernd Eiliz (ヴィルヘルム・ピーク大学ロストック) 14～16歳の青少年の性行動の影響

・Konrad Weller (ライプツィヒ青少年研究中央研究所)
青少年のパートナー移動——その社会的要因と心理的伝達の局面

・Kurt Bach (ホーエンメルゼン人民教育部)
ホモセクシュアルな青少年のカミングアウトの健康上の局面

・Hans-Joachim Ahrendt (マグデブルク医学校) DDRにおける青少年の避妊行動と避妊実践

・Joachim Weller (ドレスデン・フリードリヒ市 県病院) 青少年における女性不妊症の予防

・G. Henning (ライプツィヒ郡協議会) 妊娠中絶に関する比較調査研究の結果

・Bernhard Grindel (ヴィルヘルム・ピーク大学ロストック)
青年期の母親における性行動とパートナーシップ

・Kurt Güldner (ヴィルヘルム・ピーク大学ロストック) 若い母親と健康教育

・Hendrikje Uhlig (カール・マルクス大学ライプツィヒ) 第1子出産後の若い母親の性行動

・Erwin Günther (フリードリヒ・シラー大学イエーナ) AIDSパンデミックと若干の影響

・Gerd Linß (フランクフルト/オーデル県病院) AIDS感染予防に関する健康教育上の局面

・Albrecht Scholz (医学校「カール・グスタフ・カルス」) 性感染症予防に対する撲滅戦略

・Edith Kratzmann (ロストック中央医学センター) 学校外クラブによる性教育の補完

・Johannes Sende (「N. K. クルプスカヤ」教育大学ハレ) 性感染症についての第8～10学年生の知識

- ・ Margitta Scheinfuß (保護司) 結婚・家族・青少年・性相談所の性教育の任務
 - ・ Jutta Rüppner (エアフルト県健康教育指導センター) 青少年クラブにおける性教育
 - ・ Monika Spengler (ヴァイセンフェルス郡総合病院) 若い兵士の性教育
 - ・ Frank-Michael Kroschel (ライプツィヒ郡協議会) 生徒をパートナーシップ、愛、結婚および家族へと準備させる、4つの互いに調整しあう授業外行事の構想
 - ・ Renate Fischer (ライプツィヒ結婚・性相談所) 補助学校の性教育
 - ・ Kurt Starke 研究グループ 性行動の報告
その後の討論では、あらかじめ準備された以下の4つの寄稿でさらに話し合いがもたれた(ただし、これらの寄稿は報告書には掲載されていない)。
 - ・ Siegfried Schnabl (カール・マルクス市結婚・性相談所) セイファー・セックスの局面
 - ・ Rolf Borrman (教育科学アカデミー) 学校における性教育の新たな局面
 - ・ Constanze Löwel (ホーエンメルゼン・エーリヒ・ヴァイネルト上級学校) 下級段階における性教育
 - ・ Harald Stumpe (フリードリヒ・シラー大学イエーナ) 性教育における医師の協力
- 11) 上級学校や職業訓練学校や大学のある年度中に行なわれる、自由ドイツ青年団メンバーのための政治教育における義務コースのこと (Wolf 2000 : 63)。
- 12) なお、1991年に Sende (1991) も DDR の性教育学を振り返って総括しているが、ここでは「DDR の教員は圧倒的に「啓発モデル」にもとづいたやり方をした」と述べているだけで、その内容については批判的に検討していない (Sende 1991 : 22 ; Zimmermann 1999 : 97 より)。この点では Bach のほうがより批判的な総括になっていると言えるであろう。

引用参考文献

- Ahrendt, Hans-Joachim 1989: Sexualerziehung-Notwendigkeit, Konzeption und erste Erfahrungen eines Spezialkurses für Lehrer. *Pädagogik*, 44 (1989) 10, S. 793-800.
- Amendt, Günter (Hrsg.) 1989: *Natürlich anders. Zur Homosexualitätsdiskussion in der DDR.* Pahl-Rugenstein Köln.
- Aresin, Lykke 1983: Die Sexualität des Menschen. In: Aresin, Lykke/Günther, Erwin (Hrsg.): *Sexualmedizin.* VEB Verlag Volk und Gesundheit Berlin, S. 13-30.
- Aresin, Lykke/Bach, Kurt/Günther, Erwin (Hrsg.) 1985: *Psychosoziale Probleme der Homosexualität. Wissenschaftliche Beiträge der Friedrich-Schiller-Universität Jena.* (未見)
- Aresin, Lykke/Müller-Hegemann, Annelies (Hrsg.) 1982a (5., durchgesehene Auflage): *Jugendlexikon Jugend zu zweit.* VEB Biographisches Institut Leipzig.
- Aresin, Lykke/Müller-Hegemann, Annelies (Hrsg.) 1982b: *Jugendlexikon Junge Ehe.* VEB Biographisches Institut Leipzig.
- Bach, Kurt R. 1985a: Aktuelle Informationen über sexuelle übertragbare Krankheiten. *Biologie in der Schule*, 34 (1985) 10, S. 393-396.
- Bach, Kurt R. 1985b: Homosexualität- Gesellschaft- Sexualerziehung. *Biologie in der Schule*, 34 (1985) 12, S. 486-492.
- Bach, Kurt R. 1986: Jugend und Schwangerschaftsabbruch. *Biologie in der Schule*, 35 (1986) 1, S. 38-41.
- Bach, Kurt R. 1988: Das Thema AIDS im Biologieunterricht. *Biologie in der Schule*, 37 (1988) 5, S. 198-203.
- Bach, Kurt R. 1989: Zu einigen aktuellen Fragen der Sexualerziehung in der DDR. In: Schmigalla, H. (Hrsg.) 1989, S. 16-25.

- Bach, Kurt R. 1993: Sexualpädagogik und Sexualerziehung in der DDR. In: Bach, Kurt R./Stumpe, Harald/Weller, Konrad (Hrsg.) 1993, S. 82-89.
- Bach, Kurt R./Stumpe, Harald/Weller, Konrad (Hrsg.) 1993: Kindheit und Sexualität. Gerd J. Holtzmeier Verlag Braunschweig.
- Borrmann, Rolf 1983: Geschlechterbeziehungen - ein Kriterium des politischen, sozialen und kulturellen Niveaus der Gesellschaft. Über Beschaffenheit, Determination und Perspektiven von Sexualdifferenzen. In: Akademie der Pädagogischen Wissenschaften der Deutschen Demokratischen Republik: Jahrbuch 1983. Volk und Wissen Volkseigener Verlag Berlin, S. 339-348.
- Borrmann, Rolf 1986: Zur Sexualerziehung - nicht nur bei Görlitzer Fachschulstudentinnen. Anmerkungen zu einem Beitrag von MR Dr. sc. med. J. Richter. Ärztliche Jugendkunde, 77 (1986), S. 334-338.
- Borrmann, Rolf 1987: Sexualerziehung nicht nur, aber auch Anliegen des Biologieunterrichts. Biologie in der Schule, 36 (1987) 10, S. 358-361.
- Borrmann Rolf 1989: Zum Problem der Einheit von biotischen, sozialen und psychischen Bedingungen für die Persönlichkeitsentwicklung (darstellt am Problem der Entwicklung der Sexualität). In: Wissenschaftsbereich Gesundheitserziehung an der Pädagogischen Hochschule "N. K. Krupskaja" Halle/Köthen und dem Nationalen Komitee für Gesundheitserziehung in der DDR (Hrsg.) 1989: Jugend-Sexualität-Gesundheit. Halle und Dresden, S. 39-50.
- Brühl, Olaf 2006: Sozialistisch und schwul. Eine subjektive Chronologie. In: Setz, Wolfram (Hrsg.) 2006: Homosexualität in der DDR. Materialien und Meinungen. Männerschwarm Verlag, S. 89-152.
- Brühl, Olaf : <http://www.olafbruehl.de/chronik.htm>
- Bundeszentrale für gesundheitliche Aufklärung (BZgA) (Hrsg.) 1995: Familienplanung und Sexualpädagogik in den neuen Bundesländern. Eine Expertise im Auftrag der BZgA von Harald Stumpe und Konrad Weller unter Mitarbeit von Lykke Aresin, Kurt R. Bach, Jutta Resch-Treuwerth, Eduard Stapel. Köln.
- Dörner, Günter 1976: Hormones and Brain Differentiation. Elsevier Scientific Publishing Company, Amsterdam. = 1983 『脳の分化と性ホルモン』 神谷正明 / 高津光洋訳, サイエンス社.
- Friedrich, Walter 1984: Problemaufriß zur Theorie der Sexualität. In: Starke, Kurt/Friedrich, Walter 1984: Liebe und Sexualität bis 30. VEB Deutscher Verlag der Wissenschaften Berlin, S. 49-95.
- Friedrich, Walter/Förster, Peter/Starke, Kurt (Hrsg.) 1999: Das Zentralinstitut für Jugendforschung Leipzig 1966-1990. Geschichte, Methoden, Erkenntnisse. edition ost Berlin.
- Grassel, Heinz 1983: Sexualehtische Aufklärung und Erziehung. In: Aresin, Lykke/Günther, Erwin (Hrsg.): Sexualmedizin. Ein Leitfaden für Medizinstudenten. VEB Verlag Volk und Gesundheit Berlin, S. 164-172.
- Grassel, Heinz 1985: Sexualerziehung. In: Karlsdorf, Gerhard/Reis, Karin/Schille, Hans-Joachim/Sende, Johannes/Taubert, Erich (Hrsg.): Gesundheitserziehung im Schulalter. Volk und Wissen Volkseigener Verlag Berlin, S. 197-206.
- Lehrplan Biologie Klasse 8 1987: Biologie in der Schule, 36 (1987) 7/8, S. 285-294.
- Ministerium für Volksbildung der DDR (Hrsg.) 1988: AIDS - Eine vermeidbare Krankheit. Hinweis für die Hand des Lehrers. Berlin.
- Misgeld, Gerhard 1980: Sexualität in unserem Leben. Verlag Neues Leben Berlin.
- Misgeld, G. und K. Tosseti 1978: Homosexualität. Deine Gesundheit, H. 2, S. 53-55.
- Nationale Komitee für Gesundheitserziehung der Deutschen Demokratischen Republik (Hrsg.) 1989: Jugend und Gesundheit - Konferenzbericht. Dresden
- Neubauer, Klaus 1988 : Weiterentwicklung des Biologielehrplans Klasse 8. Biologie in der Schule, 37

- (1988) 4, S. 142-144.
- Neuner, Gerhart 1972: Gesellschaftlich-politische und schulpolitisch-pädagogische Aufgaben und Aspekte der Entwicklung und Erziehung sozialistischer Persönlichkeiten. *Pädagogik*, 27. Jg., Heft 7, S. 605-614.
- Richter, J. 1985: Sexualerziehung bei Görlitzer Fachschulstudentinnen. *Ärztliche Jugendkunde*, 76 (1985), S. 282-286.
- Richter, J. 1986: Zur Sexualerziehung. In Erwiderung der Diskussionsbemerkung von Prof. Dr. Habil R. Borrmann. *Ärztliche Jugendkunde*, 77 (1986), S. 339-341.
- Schmigalla, H. (Hrsg.) 1989 : Psychosoziale Aspekte der Homosexualität II. Workshop der Sektion Andrologie der Gesellschaft für Dermatologie der DDR und der Sektion Ehe und Familie der Gesellschaft für Sozialhygiene der DDR am 23. April 1988. Friedrich-Schiller-Universität Jena.
- Schnabl, Siegfried und Kurt Starke 1984: Homosexualität. In: Starke, Kurt/Friedrich, Walter 1984, S. 290-305.
- Sende, Johannes 1989: Zu Stand und Weiterentwicklung der Sexualerziehung der Jugend. In: Wissenschaftsbereich Gesundheitserziehung an der Pädagogischen Hochschule "N. K. Krupskaja" Halle/Köthen und dem Nationalen Komitee für Gesundheitserziehung in der DDR (Hrsg.) 1989: *Jugend-Sexualität-Gesundheit*. Halle und Dresden, S. 12-33.
- Sende, Johannes 1991: Sexualpädagogik in der ehemaligen DDR. DGG Informationen, Deutsche Gesellschaft für Geschlechtserziehung (Hrsg.), Heft 2/3.
- Sillge, Ursula 1991: Un-Sichtbare Frauen. Lesben und ihre Emanzipation in der DDR. LinksDruck Verlag Christoph Links Berlin.
- Sönnichsen, Niels 1987: AIDS: Was muß ich wissen? Wie kann ich mich schützen? VEB Verlag Volk und Gesundheit Berlin.
- Stapel, Eduard 1989: Zur psychosozialen Situation der Schwulen in der DDR. In: Amendt, Günter (Hrsg.) 1989, S. 81-92.
- Starke, Kurt 1985 = 1989: Zur Erforschung der Homosexualität. In: Amendt, Günter (Hrsg.) 1989, S. 141-147.
- Starke, Kurt 1989a: *Jugend-Sexualität-Gesundheit*. In: Nationale Komitee für Gesundheitserziehung der Deutschen Demokratischen Republik (Hrsg.) 1989, S. 178-184.
- Starke, Kurt 1989b: Bericht Arbeitsgruppe Sexualverhalten. In: Nationale Komitee für Gesundheitserziehung der Deutschen Demokratischen Republik (Hrsg.) 1989, S. 204-207.
- Starke, K. 1989c: *Jugend und Homosexualität*. In: Schmigalla, H. (Hrsg.) 1989, S. 26-32.
- Starke, Kurt/Friedrich, Walter 1984: *Liebe und Sexualität bis 30*. VEB Deutscher Verlag der Wissenschaften Berlin.
- Stumpe, H./E. Günther 1988: Die Mitwirkung der Mitglieder der Ehe- und Sexualberatungsstellen in der Sexualerziehung.-Erfahrungen in der Weiterbildung für Pädagogen der Unterstufe. *Zeitschrift ärztliche Fortbildung* 82 (1988), S. 37-39.
- Weller, Konrad 1993: Zur sexuellen Entwicklung im Kindes- und Jugendalter. Ergebnisse der Studie PARTNER . In: Bach, Kurt R./Stumpe, Harald/Weller, Konrad (Hrsg.) 1993, S. 60-72.
- Weller, Konrad/Ahrendt, Hans-Joachim 1993: Teenager und Pille. In: Bach, Kurt R./Stumpe, Harald/Weller, Konrad (Hrsg.) 1993, S. 73-81.
- WHO 1975: *Education and treatment in human sexuality: the training of health professionals*, Report of a WHO Meeting, Technical Report Series no. 572, Geneva.
- Wolf, Birgit 2000: *Sprache in der DDR. Ein Wörterbuch*. Walter de Gruyter Berlin.
- Zimmermann, Susanne 1999: *Sexualpädagogik in der BRD und in der DDR im Vergleich*.

Psychosozial- Verlag Gießen.

池谷壽夫 2011：「科学的知識普及協会研究報告会議と性教育研究会議 — 1960年代DDRにおける性教育の動向（その1）—」, 『日本福祉大学研究紀要 現代と文化』第124号, pp. 57-88.

池谷壽夫 2012a：「性教育の必要性とその目標 — 1960年代DDRにおける性教育の到達点と問題点（その1）」, 『日本福祉大学 子ども発達学論集』第4号, 2012年1月, pp. 1-26.

池谷壽夫 2012b：「社会主義人格の全面的発達, 女性・家族政策と性教育 — 70年代DDRにおける性教育（その1）—」, 『日本福祉大学 社会福祉論集』第127号, 2012年9月, pp. 1-44.

池谷壽夫 2013：「80年代におけるDDRのホモセクシュアル解放をめぐる取り組みと問題点」, 『日本福祉大学研究紀要 現代と文化』第128号, 2013年9月, pp. 39-76.